

エルンスト・クリーク伝② (翻訳と解説)

— トマーレ著『エルンスト・クリーク文献目録』より —

Übersetzung: Biographie Ernst Kriecks ②

— aus „Bibliographie Ernst Kriek“ von E. Thomale —

金 田 健 司

Kenji KANEDA

訳者解説

ここに訳出したのは1970年に西ドイツのユリウス・ベルツ社から出版された(執筆は1968年)エックハルト・トマーレ(Eckhard Thomale)著『エルンスト・クリーク文献目録－著作・二次文献・小伝』のうち、「はじめに Vorwort」(SS. V-VI), 「序論 Einleitung」(SS. VIII-XVI), 「補遺 エルンスト・クリーク伝 Anhang: Zur Biographie Ernst Kriecks」(SS. 204-213)の全訳である。訳者は本誌第38号(2003年)に、ミュラー(Gerhard Müller)が1978年に出した『エルンスト・クリークと国家社会主義的な学問の改革－第三帝国における学問論と大学改革の動機および動向』の最終部分にあたる「補遺 エルンスト・クリーク伝記的スケッチ」を訳出した。ミュラーの書は600頁を超える大著であり、クリークの文献目録を含め、生育史の視点からも詳細な考察と記述がなされているが、ここに訳出したトマーレのものは、ミュラーの研究に先立つこと8年前に、戦後はじめてまとめられた文献目録である。本書がなければ、おそらくミュラーの浩瀚な研究書もうまれ得なかったであろうし、戦後の膨大な数にのぼるナチズム研究にも大きな支障となったに違いない。その意味で、戦後最初に世に問われたクリークに関する研究書を、一部分ではあるが訳出することには少なからぬ意義があるものと考ええる。

クリークを研究するさい、われわれは教育思想史における彼の位置を考察することよりも、むしろ彼の思想に内在し、それを支えていると思われるイデオロギーに目を向けがちある。だが、クリークをナチとの関わりからとらえようとする限り、たとえ彼がいつ書いた著作を研究の対象にしよう、また彼が何を論じた著作を対象にしようと、出てくる結論は“ナチ・イデオロギー”の一言に収斂されよう。今日、クリークを研究することになんらかの意義があるとすれば、それはクリークという一つの現象がドイツ教育思想史——広く言えばドイツ精神史——の中に位置付き得るのか否かを検証することであって、彼がナチにコミットした事実を手を変え品を変え追認することではない。ましてや、クリークの名誉回復を図ることではない。では、本書でトマーレは何を意図したのか。彼は次のように言う。「筆者にとって重要なのは、クリークの覆い隠された名誉を回復させることではなく、正しい議論の下準備をすることであり、また同時に、これまでは研究の単なる兆し

にしかすぎなかった、帝国期とナチズム期の間におけるドイツ人教育学者の精神史をありありと描き出すための下準備をすることなのである。」(S. V) クリークについては、教職課程のテキストから教育思想史や社会思想史の専門書に至るまで、今日でもさまざまに論じられている。しかしながら、彼とその思想が精神史の中にどのように位置付くのか(あるいは位置付けられないのか)という問題に関しては、いまだ結論を得ていないように訳者には思われる。

この問題を考える一助となることを期し、本誌第38号につづき、本稿でもクリークの生涯を概観することとした。なお、彼の生涯を概観することを目的とするため、当初は巻末の「補遺 エルンスト・クリーク伝」のみの訳出を考えたが、「はじめに」と「序文」にも、クリークの生涯を概観するうえで重要な示唆が多くあると思われるため、これらもあわせて訳出した。

「補遺 エルンスト・クリーク伝」においてもふれられているように、クリークは1931年にプロイセン文部大臣グリメの指示によってフランクフルト教育アカデミーの職を解かれ、ドルトムント教育アカデミーに左遷されているが、本稿では、この超法規的左遷劇の原因となった、同年夏のクリークの演説を訳者補遺として後掲した。トマーレによれば、クリークは1931年夏にタウヌスのオーバーゼールバッハで催された夏至祭で、「第三帝国の希求に帰着する『国民の蜂起』を考えた尋常ならざる激烈な演説」をおこない、「その疑問の余地のない極右的な内容」が災いして左遷された。この演説原稿は、翌1932年に出された『民族的全体国家と国民教育 Völkischer Gesamtstaat und nationale Erziehung』の第2版では補遺として掲載されている(本書の初版は夏至祭のあとすぐ、1931年に出版されているが、訳者はこの「補遺」が初版の段階から掲載されていたかどうかについて確認できていない)。クリークはヴァイマル共和国成立以来、その政治理念と政治体制に疑問を感じつつも、この体制の中で何とか自己の理念(大学における小学校教員の養成と教員身分の統一)を実現しようとしていた。ヴァイマルに一縷の望みをかけていたといっていよう。しかし、グリメによる左遷により——この左遷には、クリークと近い考えをもっているボイムラーやイエンスシュバカリではなく、クリークとは日頃から相容れない関係にあったフリットナー、ケルシェンシュタイナー、リット、シュプランガー、ペーターゼンさえもが反対の署名に加わっている——クリークはヴァイマル体制内での自己の理念の実現を不可能と断じ、ナチ党が政権を掌握するよりも前に、いわば「確信犯」として、ナチに接近していくこととなった。ナチズムと自己の理念を同定し、ナチズムを実現させることによって自己の理念を実現しようとしたわけである(本誌第38号41～42頁を参照されたい)。その意味で、この演説は、クリークがヴァイマル体制と決別する契機となった演説でもあり、彼の生涯を概観するうえで、吟味が不可欠であると考ええる。本稿では訳者補遺として、第2版に掲載されているこの「尋常ならざる激烈な演説」を最後に示しておきたい。

原著とその構成(太字は本稿にて訳出した部分)

Eckhard Thomale

Bibliographie Ernst Krieck, Schrifttum-Sekundärliteratur-Kurzbiographie,

Pädagogische Bibliographien Reihe A Band 4, Herausgegeben von Leonhard Fröse und Georg Rückriem, Weinheim · Berlin · Basel; Verlag Julius Beltz, 1970.

Vorwort（はじめに）

Einleitung（序論）

Erläuterungen（解説）

Abkürzungen（要約）

BIBLIOGRAPHIE ERNST KRIECK エルンスト・クリーク文献目録

A) Primärliteratur（一次文献）

- I Bibliographien（文献目録）
- II Übersetzungen（翻訳書）
- III Bücher und Aufsätze（著書と論文）
- IV Rezensionen（批評）
- V Titel der Vorlesungen und Übungen（講義と演習の題目）
- VI Bucheditionen（編者となった著書）
- VII Zeitschriften- und Serieneditionen（編者となった雑誌ならびに双書）
- VIII Dissertationen und Habilitationen
（審査を担当した博士号学位申請論文ならびに大学教授資格）

B) Sekundärliteratur（二次文献）

- I Biographien（伝記）
- II Darstellungen（クリークの著作の解説、要約、批評等）
- III Rezensionen（クリークの著書の解説、要約、批評等）
- IV Ausgewältes Schrifttum zur Rezeption Ernst Kriecks
（クリークの批評に対して書かれたもののうち代表的なもの）

Zeitschriftenverzeichnis（クリークの著作が掲載された雑誌の一覧表）

Verfasserverzeichnis（B の I から IV までにでてきた著者、共著者、編集者等の一覧表）

Sach- und Personenregister（事項・人名索引）

Anhang: Zur Biographie Ernst Kriecks（補遺：エルンスト・クリーク伝）

訳出にあたって

- ①本文中 „ “ で書かれている語句については「 」にて表記し、原語を付した。また、意訳した語句、キーワードと思われる概念についても本文中に〔 〕にて原語を付した。
- ②必要と思われる人物については脚注に若干の説明を加えた。なお、そのさいには以下のものを参考にした。

- ・ Moeller van den Bruck, A. (herausgegeben von Hans Schwarz), Das dritte Reich, Hamburg; Hanseatische Verlagsanstalt, 1931.
 - ・ Petersen, P., Pädagogik der Gegenwart, Ein Handbuch der neuen Erziehungswissenschaft und Pädagogik, Berlin; Verlag von E. S. Mittler & Sohn, 1937.
 - ・ 稲富栄次郎監修『教育人名辞典』理想社 (1962年)
 - ・ Wilhelm, Th., Pädagogik der Gegenwart, Stuttgart; Alfred Kröner Verlag, 1977.
 - ・ Gallin, A., Midwives to Nazism, University Professors in Weimar Germany 1925-1933, Georgia; Mercer University Press, 1986.
 - ・ Kuhn/Massing (hrsg.), Politische Bildung in Deutschland, Entwicklung-Stand-Perspektiven, Leske・Budrich; Verlag Opladen, 1990.
 - ・ Sontheimer, K., Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik, Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933, München; Deutscher Taschenbuch Verlag, 1992.
 - ・ テーラー他著／吉田八岑監訳『ナチス第三帝国事典』三交社 (1993年)
 - ・ 金子雄司他『岩波＝ケンブリッジ世界人名辞典』岩波書店 (1997年)
 - ・ Schneider, M., Unterm Hakenkreuz, Arbeiter und Arbeiterbewegung 1933 bis 1939 (Geschichte der Arbeiter und Arbeiterbewegung in Deutschland seit dem Ende des 18. Jahrhunderts, herausgegeben von Gerhard A. Ritter, Band 12), Bonn; Verlag J.H.W. Dietz Nachfolger GmbH., 1999.
 - ・ Giesecke, H., Hitlers Pädagogen, Theorie und Praxis nationalsozialistischer Erziehung, Weinheim・München; Juventa Verlag, 1999 (2., überarbeitete Auflage).
 - ・ 岩波書店編集部編『岩波西洋人名辞典 増補版』岩波書店 (2000年)
- ③本文中、隔字体ならびに大文字で書されている語句については太字にて表記した。
- ④訳文をわかりやすくするために補ったほうがよいと思われる語句については〔 〕を設け付記した。
- ⑤長いセンテンスによっては訳文をわかりやすくするために、挿入句を——と——の間にいれて表わした。

なお、訳出にあたっては精確さと読みやすさを旨としたつもりではあるが、全般にわたり、訳者自身、得心できない箇所も少なくない。読み違いや誤訳もあるとは思いますが、御叱正・御鞭撻をいただければ幸いである。

はじめに (Vorwort)

この文献目録の着想は、ナチ・ドイツの教育科学に対する長年の取り組みからうまれたものである。この種の文献資料、とりわけ人物に関する文献資料の欠如には、すでに以前より著しいものがあった。それゆえエルンスト・クリークの文献目録は、この欠如を補う最初の寄与であると考えられる。では、それをたどることにしたい。

この文献目録は、体系的・文献解題の原則にもとづいて整理されたものであり、彼の著作についての文献を含め、世に出たエルンスト・クリークの学術上の全著作を含んでいる。またさらに、この文献目録はクリークによって編集された雑誌、双書、また〔彼によって編纂された〕他の執筆者による出版物、彼の講義題目、ならびに彼によって〔審査が〕担当された博士号請求論文や大学教授資格論文への完全な扉を開いている。またこの文献目録は、クリーク教育科学における思考形式の変化に関する、〔筆者の〕教育科学分野における博士号請求論文の、文献解題上の副次的成果でもある。

昔日のドイツにおける「純粹教育科学 *reiner Erziehungswissenschaft*」の中心的理論家〔クリーク〕の名前や人柄と結びついている、また後にはナチズムの教育哲学者たちや世界観哲学者たちの名前や人柄と結びついている著作についての全領域にわたる包括的なまとめによって、目録は、とりわけドイツにおける教育学や教育科学思想の新しい歴史をめぐる理論史研究に役立つことであろう。弧を新観念論的な文化哲学・教育哲学から「人種的・民族的・政治的教育科学 *rassisch-völkisch-politischen Erziehungswissenschaft*」にまで張り渡しているクリークの思考の展開からは、しかしながら社会学、民俗学、政治学といった学問の歴史との関わりや、またとりわけ国家主義やナチズムにもとづく政治学的・教育学的な思想史との関わりが生じている。

すべてに完全を求めるべく努めたこの目録は——しかしながら、ここに述べられたテーマ領域については、将来わたる継続的な探究によって再び広げられることになるであろう——ドイツ教育理論史において思想史的に重要であると同時に体系的にも意味深い位置にある書誌学的記述の隙間を埋めるものである。筆者にとって重要なのは、クリークの覆い隠された名誉を回復させることなく、正しい議論の下準備をすることであり、また同時に、これまでは研究の単なる兆しにしかすぎなかった、帝国期とナチズム期の間におけるドイツ人教育学者の精神史をありありと描き出すための下準備をすることなのである。

筆者は原本を閲覧しながら、あらゆる言明の資料としての正確さと完全性を高めることに特に骨を折った。それゆえ、筆者はマールブルク西ドイツ図書館（プロイセン文化財団）、マールブルク大学図書館、ハイデルベルク大学古文書館に対し、協力的な支援と有益な指示を感謝するものである。

筆者は特にボンのフリードリッヒ・エーベルト財団、ハノーファーのフォルクスヴァーゲン製作所財団に感謝しなければならない。これらの財団の雅量ある奨学援助がなければ、長年にわたる費用のかかる目録の作成は実行不可能であった。また、この本を当双書に加えてくださったことに対し、筆者は『教育学文献目録 *Pädagogischen Bibliographien*』の編集責任者で大学教授のレオンハルト・フレーゼ博士と、大学教授ゲオルク・M・リュックリーム博士に感謝するとともに、発刊についてはベルツ社に謝意を表するものである。

マールブルクにて

1968年10月

エックハルト・トマーレ

序論 (Einleitung)

テーマと結びついている文献目録は、構成上、単に研究の手助けとしての書誌学的に重要なデータや使用目的に責任を負っているだけではなく、同時に目録それ自体が研究の対象でもある。エルンスト・クリークの著作目録の内容と形式に関しては、この一般的要請を背に受けて、特別な問題が究明されることになる。そして、その特別な問題は、クリークに固有な思考形式のゆえに、彼の著作の客観的・時代的な構造の問題のゆえに、そして彼の精神史上の位置付けのゆえに、決定的な基点を保持している。

I

クリークの全著作の対象、目的設定ならびに思考処理は——歴史的ならびに体系的に見て——多面的であり、それゆえほとんど構成能力を欠いていることがわかる。したがって、時代的な縦断面と横断面を〔彼の考察に〕据えようとする試みも、あるいは彼の限定的な教育学・教育科学の著作を解き明かそうとする試みも、ただ〔彼の〕主観的な解釈の土台からのみ成し得るのである。〔クリークの〕このような企図は、前もって設定された「教育学的なるもの」についての他者の判断基準を自らのものとして採用してしまっているか、もしくはこれらがクリーク自身によって探究され、示されたものであるかのいずれかである。〔しかしながら〕これら二つの手続きでは、〔彼の〕企図には対処し得ない。クリークに内在し、彼を方向付けている基準などというものはありえないのだ。というのも教育、陶冶、そして教育科学の関係についての彼の理解は、内容的にも概念的にも間断なく、時として根本的な変化を免れていないからである。論証的に構築された詳細な論文の中でのみたどることのできる、また、解説することのできない文献目録の中にはたどることのできないこの変化にはさまざまな原因があるのだ。変化はその理由をクリークの基本的な思考形式から受けている。教育の概念、教育の実態、教育についての学問的着想は、絶え間なく移り変わっている社会学的・政治学的なカテゴリー、さしあたり教育学外の原点（共同体〈Gemeinschaft〉、公共性〈Öffentlichkeit〉、民族〈Volk〉、国民〈Nation〉、人種〈Rasse〉）と結びついており、それゆえそれらを変動しつつある国家やゲゼルシャフトの理解にも適用してしまっているのである。これらの変化の外面的な理由は、こういった〔彼自身に内在する〕要請に従って、「教育学の根本概念 pädagogische Grundbegriffe」をさまざまな種類の政治的な価値へと置き換え、変動する政治的な権力システムによって「教育学の根本概念」の機能を変え、別の機能を持ったものにしたことにある。「教育学の根本概念」のうち、イデオロギー的操作の中で〔なお〕残った基礎的部分は、クリーク自身によって再三にわたり明確にされており、「教育学の根本概念」が全体主義的政治権力を正当化するための定理へと変化を遂げていく脈絡の中で、はじめて明確ではなくなっている。しかしながら特に、一般的に言うならば「政治的なもの Politischen」に対する「教育学的なるもの Pädagogischen」の

真に教育科学的な自立性の問題を考慮して——詳しく言うならば「全体主義国家の固有の権限 *Eigenrecht des totalen Staates*」に対する教育の自立性の問題を考慮して——クリークは自らと精神が似通った当時のドイツの教育学者たち（たとえばベック、ギーゼ、ヘールマン、クロー、あるいはヴィルヘルム⁽¹⁾）があえて危険を冒した時も、〔自らは〕さらに「教育学的なるもの」自立性の問題に向ったのである。〔だが〕彼にあって、教育学的な思考と政治学的な思考は〔やがて〕、「民族的・政治的世界観 *völkisch-politischen Weltanschauung*」や「民族的・政治的人間学 *völkisch-politischen Anthropologie*」といった形の中で、同一のものにまで溶け合っていく。

したがって、彼が教育学、社会学、哲学、そして政治学の辞典や案内書の中に言及されていることは、実際適当なことであり、また広くおこなわれているクリーク受容のあり方についても独特なもののように思われる。しかしまた、一定の厳密な立場から歩み寄ることを放棄せざるを得ない彼の著作を全体的に分析するならば、次のようなもっともな認識へ帰着する。つまり、彼の思索の範囲は、限定的に線引きされた分野を考察するという枠組みをもってしてはとても踏破され得ないし、とりわけ彼の思想的ないしは政治的な影響を究明しようとすることは不可能である、という認識へである。彼が——なかんずく思索の展開の初期において——「自律的教育 *autonomen Erziehung*」や「人間形成 *Menschenformung*」の現象形態を追究した場そのものが政治学的、社会学的、そして認識論的な関連付けの中に埋め込まれた、教育を指向した彼の立場での哲学であって、それゆえ概念的に把捉され、書き換えられているのである。ゆえに、彼の思索はこれら「教育学外 *außerpädagogischen*」の思考の地平へ遠く移され、そこでやっととらえられるのである。

エルンスト・クリークの文献目録に関してこれらのことを確認しておくことは、次に述べることと同じ意味をもつ。すなわち、今日の教育科学の実にさまざまな問題設定にもとづいた、また〔クリークの〕全著作の構造にもとづいた、そしてまた社会科学の対象の多様性に依拠した分類は実行不可能であって、選択・分類することそれ自体の中にすでに見解が存在することの危険を冒す必要はないのである。それゆえ文献目録は、ただ書誌学上の分類原則（出版の方式）のみを採用すれば

訳者註

⁽¹⁾ Beck 詳細不明

Giese, Gerhard (1901～没年不祥)

ペーターゼンの『現代の教育学－教育科学・教育学便覧 *Pädagogik der Gegenwart, Ein Handbuch der neuen Erziehungswissenschaft und Pädagogik*』(1937)では、ケルシェンシュタイナー、シュブランガー、ノール、フリットナー、リット、ヨハンゼンなどとともに、文化教育学の領域に位置付けられている (S.98)。

Hehlmann, Wilhelm (1901～没年不祥)

国家社会主義教育学者。上にあげたペーターゼンの書に若干の記述あり (S.88)。

Kroh, Oswald (1887～1955)

国家社会主義教育学者ならびに教育心理学者。ゲッティンゲン、テュービンゲン、ミュンヘン、ベルリンの各大学の教授を歴任。国家社会主義時代の代表的著書としては『教育学的人間学 *Pädagogische Anthropologie*』(1934)があげられる。

Wilhelm 詳細不明

よいのである。そのほか、もし年代順に整理しようとするならば、著作に内在する分類上の根拠をもとに、また、一次文献の年代順の配列が、通例、著者の生育史的な (genetische) 解釈に合わせた前提を作り出してしまうという経験を考慮しておこなえばよいのである。こうして、間接的にはこのような文献目録の範囲をめぐる問題も残っているのだが、文献目録は、先見的な問題設定に左右されない、そしてまた、あとになされる解釈の試みに寄与する自らの意義を、時代順に配列された全体の中においてのみ実現することができるのである。

II

ドイツ教育学、わけでも教育科学思想におけるクリークの精神史的位置付けは、彼を——言葉の本当の意味で——得体の知れないもののように見せている。絶え間なく層を成して重なっている彼の思考の地平、国家社会主義の時代になって初めてそうなったわけではないイデオロギー的なわけのわからぬ荒っぽい言葉へとしばしば踏み外す彼の概念、めったに見られない意見の異なる者との私情を交えない討論への気構え——これらすべての事情が、彼の時代においても、また今日の議論においても、クリークを最も評価の定まらない著者の一人にしまっているのだ。その場合、実際におこなわれた討論のうち、ほんのわずかなものしか、客観的精確さを証明できないのだ。いずれにせよクリークは、絶え間ない見解の衝突の中に巻き込まれた、ひどく両極分解したドイツ教育学に影響を与えていた。熱狂的な、ときには狂信的な賛同と確信的な拒絶は相互に入れ替わっていた。クリークの膨大な著作の分析は、量的にも質的にもこの確証を裏付けている。ヴァイマル共和国が終焉を迎え、国家社会主義の国が始動した頃におこなわれた、彼を肯定的に受け容れるには礼儀にも適い得策でもあったものの熟慮には欠けた〔クリークの〕弁明も、また、多くの場所でおこなわれた〔第一次世界大〕戦後ドイツの教育科学についての広範な論戦も、クリークとの学問上の付き合いにおいては決然とした、礼儀をわきまえた作法を生じさせはしなかった。クリークという独学者は依然として変わり者のままであった。というのも、彼がくり返し頻繁に、しかも気に障るやり方で挑発していたドイツ教育学の著名な代表者たちの多くは、彼の周りに、実際今日になってやっと解消された、かの〔独学者という〕暗黙の学術上のタブーを築いたからである。これらの名前の多くは、それゆえこの文献目録の中に、むなしく探し求められることになるであろう。

しかしながら学問の自律性と、認められつつあった〔教育科学の〕位置決定を目指した試みとして認識されている、ドイツの新たな教育科学の方法論上の発展は、相当程度、エルンスト・クリークの名前と結びついている。方法論的に基礎付けられた教育学から「教育科学」への転換を目指した彼の洞察、批判、提言——なかでも「比較教育科学 Vergleichende Erziehungswissenschaft」と言う概念と問題設定——は単に思想史的に有効なだけではなく、ここでクリークによって展開された教育科学の発展にとって体系的に重要な貢献であり、「教育についてのわれわれの知識の今日の状況 gegenwärtige Situation unseres Wissens von der Erziehung」(デップーフオアヴァルト／デルボラフ⁽²⁾) は不変の功績と認められている⁽³⁾。

彼の道行き〔Bahn〕については更なる考察がなされているにもかかわらず、彼が早くから始め、

のちにはほとんど類例のないものとなった教育と教育科学についての政治化や国家社会主義的イデオロギー化のための尽力は、歴史的に弁明責任があると考えられる教育学者が、この功績を認められるのをたしかに妨げてしまっている。クリークもまた成果を求め、何度となく徹底的に実り多い独創的な萌芽を生じさせてはいるのである。多くのものは草稿、観念的なスケッチ、展開途上の箴言のままであるが、彼はさまざまなことを新たな変形の中に間断なく繰り返したが、彼の論文が数多くタイトルを一致させていることは、〔彼の〕多弁を証明している。これに反し、ほかのものは常に新たな基礎付けの試みがなされている。とりわけあとになってからの、プロパガンダとイデオロギー的教化の要求に意識的に焦点化された、それゆえもはや単に理解の広がりには役立つことのない出版活動は、これ以上の結果をもたらさなかった。言葉の上の御都合主義とイデオロギーにもとづく〔内容の〕希薄化は、すでに始まっていた彼の粗雑に発展した思考の体系化を促した。これは、もともとの教育科学的な関心の切断であり、それどころか明らかな過ちであった。同様の停滞〔Stagnation〕は、当時のドイツの教育学における〔彼の〕早くからの擁護者との関係においてもまた、明らかであった。国家社会主義の時代に入る前、クリークは少なくとも時折は、彼らと公平な目の高さで接していたし、だから彼らも、彼をナチ党による政権掌握ののちも評価していた。彼はかつて政権がイデオロギー的に変節したあとも、それゆえ「正統的な orthodox」、 「市民的な妙な考えにとりつかれた bürgerlich-versponnen」、 「民族に敵対的な volksfeindlich」、あるいはさらに「有害な schädlich」といった〔言葉の多用による〕論ずる価値のない言語規制が布告されたあとも、彼らのことを総じて心にとどめていた。〔クリークに対する〕憚ることのない学術上の市民権剥奪は、当初はまだまったくの教育学的な議論に向けられていたが、徐々に政治的な排撃という結果になっていった。というのも、クリークは彼固有の思考処理に忠実であり、教育学的な評価はまれにしか下さず、いつも政治的な評価を下していたからである。それとは反対に、自らの「教育哲学 Erziehungsfelosophie」を民族的保守主義の視点から、またそれと結びついた国家社会主義の視点から適用し、例のあたかも理論的にみえる証明をドイツ人の精神生活に認められる精神史的連続性によって展開しようとした二流の作家たち（たとえばメラー・ファン・デン・ブルック、シュターペル、あるいはチェンバレン⁽⁴⁾）は、特にクリークのおかげで〔durch〕、それまで経験したことも

⁽²⁾ Döpp-Vorwald, Heinrich (1902～没年不祥)

ペーターゼンの高弟。人間の倫理的責任を根底とする教育学的實在論に立脚した教育科学の構築を試みた。代表作には『教育科学と教育の哲学 Erziehungswissenschaft und Philosophie der Erziehung』（1941）などがある。

Derbolav, Josef (1912～)

教育人間学的立場から教育学をとらえなおす。著書には『教育学の構造的展望 Systematische Perspektiven der Pädagogik』（1971）などがある。

⁽³⁾ このような認識は、デップ・フォアヴァルトやデルボラフに限らず、広く認められるといつてよい。たとえば、ロッホナーは『ドイツの教育科学 Deutsche Erziehungswissenschaft』（1963）の中で、クリークの政治性や理論上の欠陥については厳しく批判しながらも、教育科学を指向した先見性に関しては、彼を次のように高く評価する。「クリークはドイツの教育科学の歴史に確固たる地位を維持している。」（S.324）「まったく疑いようのない重大な欠陥は別として、クリークの姿勢の根底にあるものを再考することは不可欠である。教育科学を科学として独立させることに向けられた彼の精神的で前向きな意欲は、依然として画期的なものである。このことに関して、彼は決して孤立していない。」（S.330）

ないような〔自らの著作の〕普及を身を持って体験したのだ。そのさい、クリークは〔彼らによる〕乱暴な歴史の改竄にも驚愕することなく、教育学の諸領域は、民族的・保守的国家学がなんらかのやり方で問題とすることを、最終的には常に証明できると誤信していた。だから、まさにこれらの著作家たちがクリークの肯定的書評者の主要メンバーであったのは偶然ではないのだ。そして、彼の学問上の発展過程において必要とされた究極的認識とは、あらゆる学問——したがってまた教育科学も——は政治的なものに、詳しく言えばつまり「民族的全体国家に仕える手足 dienendes Glied des völkischen Gesamtstaates」にならねばならないというものであり、学問の意義はその中——研究のための研究の中にではない——に存在し、学問は志を同じくする者か、もしくはさしあたりずっと以前から精神的に「同じ反応を示す者 Gleichgeschaltete」にのみ心服させるに足る影響を及ぼすことができるというものであった。これ以外の学問的世界において、共鳴など起こり得なかった。

したがって今日のドイツの教育科学は——心理的に無理からぬ理由からであれ、科学理論上の動機からであれ——クリークをたいてい「酷評 verrissen」してきたか、さもなければ文献リストや脚注の補助的資料の中へ押しやってきた。彼は、必然的に政治的方向転換をきたしたに違いない教育の機能的解釈において提示することが許されている、否定的に方向付けられたスタンダードな例に、依然としてとどまったままなのである。当時の教育科学をクリークがとりわけ政治的に方向転換したように、今日彼らは自らの立場でクリークを政治的に評価している傾向がある。ほんのわずかな例外にしか、この全体像の誤りを正すことはできない。クリークの文献目録は狭隘な叙述を越えて、広く固定してしまった入り口の枠組みをこのような受容の方法へと開くために、かの人物の著作に展望を与えることを内容としている。これは体系的であると同時に徴候的〔symptomatische〕な価

⁽⁴⁾ **Moeller van den Bruck, Arthur** (1876~1925)

政治評論家で美術史家。フランスとイタリアに長く滞在したあと、ベルリンで文筆生活をおくった。革命的保守主義に立脚した国家主義思想を展開した。一般に、ナチス帝国のことを第三帝国と呼称するが、それは彼の書『第三帝国 Das dritte Reich』(1923)の書名に由来している。この書名は日常闘争の標語として、彼の存命中も、また自殺後も象徴的に用いられ、ヴァイマル期からナチス期まで、ドイツ社会に絶大な影響を与えた。蛇足だが、彼はドストエフスキーのドイツ語版全集(全22巻)を10年(1906~1915)の歳月をかけて編纂・公刊したことで知られている。

Stapel, Wilhelm (1882~没年不祥)

政治評論家。個人はその価値を市民として、国家公民としてもつのではなく、あくまでも民族の成員としてもつという考え方に立脚し、民主主義・自由主義と対立するだけではなく、国家的公民教育とも相容れない「民族的公民教育 volksbürgerliche Erziehung」という概念を提起した。

Chamberlain, Houston Stewart (1855~1927)

イギリス生まれで、ドレスデン、ウィーン、バイロイトに暮らしたのち、ドイツに帰化した哲学者、人類学者、社会学者。当初はカントの思想から出発したが、やがてフランスの思想家でアーリア民族の優越性を唱えるゴビノーの人種論に心酔し、ゲルマン人種が世界で最も優秀な人種であることを説く。ローゼンベルクの『20世紀の神話 Der mythus des 20. Jahrhunderts』の基本的枠組みとなったと言われる『19世紀の基盤 Die Grundlagen des 19. Jahrhunderts』を著した(1899)。この書で、彼は狂信的な汎ゲルマン主義と反ユダヤ主義を結合したナチス人種思想への道を展開し、世界靈魂は優秀なるアーリア民族のドイツ精神のもとに輝くことを確信的に述べている。作曲家ヴァーグナーの信奉者でもあり、彼の娘と結婚し、バイロイトで死去した。早くも1923年には、同地でヒトラーと面識を得る。すでに存命中(24年頃)から、ヒトラーがドイツを導くことになると主張。27年の葬儀には、数少ない一般参列者の中にヒトラーがいた。

値についての学説史研究の要求するところなのである。〔これは〕クリークが熱心に、また片手間に言及した、しかしながら中心となる事柄や問題設定からして彼にとっては詳細に叙述される必要のあった著作に関わる問題である。

二次文献には、クリークと同時代およびそれ以後の分析から今日に至るまでの僅かな数のものが示されている。これらの文献は将来の研究に、引き続き委ねられることになるだろう。

III

ドイツの他の教育学者、たとえば精神科学的・解釈学的教育学の一派とは逆に、クリークはドイツにおいても外国においても「学校形成的に Schulebildend」は影響を与えなかったし、またヘルト、クンツ、ラクロアもしくはシュトゥルム⁽⁵⁾といった例外もまた問題にはされなかった。彼らにしても、現実的な価値を凌駕するような原理的な価値にはなんら到達できなかったのだ。協働編集者として、学校行政上の戦友として、ナチ黨員として、国家社会主義教員同盟〔NSLB=Nationalsozialistischer Lehrerbund：以下、ナチ教員同盟と略記する。〕のメンバーとして、あるいはまた——これは少なくとも個人的にはあり得ることなのであろうが——学問上の弟子として、クリークに感謝すべき立場にある人々のグループはたしかに比較的大きいものであった。彼らを覆っていた激しい政治的な行動性に加え〔bei〕、クリークの直面していた個人的・専門的な職務と、そしてまたなによりも彼自身が教員組合、党、大学〔Hochschule〕での活動を最後の最後まで必要としたとってよいだろうし、またそれらの仕事は〔彼らに対し〕絶えず範を示していたのであった。ともかく、

⁽⁵⁾ Hordt, Philip (1890~1933)

クリークの高弟で民族的・全体的实在論の立場から教育論を展開した。クリークが皆無といって良いほど授業論・実践論を展開していないのに対し、ヘルトはクリークの政治的・民族的形成論を授業にどう具体化していくかを考察した。著書には『学校の意味について——心理学的・文化史的試み Vom Sinn der Schule, Ein psychologischer und kulturgeschichtlicher Versuch』(1924)や、師クリークの生誕50年を記念して著した『エルンスト・クリーク——運命と課題としての民族 Ernst Kriek, Volk als Schicksal und Aufgabe』(1932)などがある。

Kunz, Willi (生没年不祥)

クリークの生誕50年を記念するヘルトの著書に続き、もう一人の高弟クンツは生誕60年を記念する著書『エルンスト・クリーク——生涯と著作 Ernst Kriek Leben und Werk』(1942)を著している。またクリークの『世界観の原理としての生と学問の問題 Leben als Prinzip der Weltanschauung und Problem der Wissenschaft』(1938)では、補遺で「ゲーテにおける生の原理 Das Lebensprinzip bei Goethe」を執筆している。

Lacroix, Wilhelm 詳細不明。ただし、ラクロアは前記ヘルト著『エルンスト・クリーク』(1932)に「有機的根本思想 Der organische Grundgedanke」と題する論文を寄せているほか、同書第二版(1936)と同じくヘルトの『母国語と国民教育——国民学校におけるドイツ語教授入門 Muttersprache und Volkserziehung, Zugleich eine Einführung in den Deutschunterricht der Volksschule』の第三版(1936)にヘルトへの弔辞を記している。

Sturm, Karl Friedrich (1880~没年不祥)

ディルタイの精神科学、リッケルトの文化科学、リット、コーン、シュブランガーの文化教育学、クリークの教育科学の影響を受け、理想主義哲学の色彩の濃い『一般教育科学 Allgemeine Erziehungswissenschaft』(1927)を著す。ドレスデンにて視学官を歴任。著書には上記のほか、『教育学の改革運動 Die Pädagogische Reformbewegung』(1930)、『現代の教育科学 Erziehungswissenschaft der Gegenwart』(1930)等がある。

これらは厳密な意味での学問的業績とはならなかった。戦争と第三帝国の瓦解が、すでに昔からやられていた〔これらの〕ことをやっと終わらせたのだ。——ここで補足的に、全体主義的権力構造内部における体制順応型ライバルたちの深刻な結末に、注意を喚起しておきたい。実にさまざまな種類の組織が、新たな理論的・イデオロギー的な競合状態の中に絶え間なく置かれ、そのさいたびたび互いに邪魔をし合い、まさにそうすることによって政略的装置である管理独裁政治の存続に参与してしまったことは、単に政治学的に重要な現象形態だけに属する問題ではない。事実広範囲な思想統制がおこなわれていたことを認めるにしても、国家社会主義ドイツの教育科学も、均制化〔Homogenität〕や閉鎖性〔Geschlossenheit〕といった観念を〔自ら〕提供しようと申し出たわけではないのだ。しかし、ここにおいては熟達した観察者にしか、〔これらの語が〕概念的な規定なのか、暗黙の取り決めなのか、それとも考えが実際に一致したものなのかを見分けることはできない。〔均制化や閉鎖性などの言葉と〕類同の言語慣用は、学問体系の諸制約や可能性に応じて、当時の教育科学においても、また狭隘な国家社会主義的なさまざまな意見の内側にあっても是認されていたとは言え、厳密な秩序の中での議論で用いられることはめったになく、たいていは党当局を介して間接的に用いられていた。クリークもまた、イデオロギー的に定位された右寄りの教育学説ゆえに、避けることのできない個人的な対抗関係や権限闘争の例外ではなかった。まず一般に認められている案内に従って判断するなら、彼は国家社会主義的な考えに立つもう一人の大学教員（ボイムラー⁽⁶⁾）との間で、特に青少年と関係のある党組織（ヒトラー・ユーゲント／帝国勤勞奉仕団）についての考え方や要求をめぐる、激しい対抗の重圧の下におかれていた。このような状況の中、教育学上の諸問題もまた、それまでは十分に是認されてきた〔クリークに対する〕評価の独占について、クリークに異議を唱える幹部階層（アルプ、カウフマン、シュテルレヒト、ヴァロヴィッツ⁽⁷⁾）を形成した。そのため彼の弟子たちもまた、中身のある教育学上の研究を示すことよりも、むしろイデオロギーを操る機敏さ〔Wendigkeit〕を必要とする、この競争の中に巻き込まれてしまった。

それゆえ、クリークによって著された大学に関する著作の対象と問題設定を究明することは、それだけ一層重要であるように思われる。この文献目録には、その学術論文の箇所に、これらの著作

⁽⁶⁾ **Bäumler, Alfred** (1887～1968)

クリークとならび称される国家社会主義教育学者・哲学者。カントの『判断力批判』の研究から出発するが、観念論が非ゲルマン的であるとし、ニーチェ研究へ移行する。教育学説としては、民族的・全体的實在論から論を展開した。1928年ドレスデン大学哲学部員外教授、29年同正教授、33年ベルリン大学教授（政治教育学）。著書には『カントの美学における普遍妥当性の問題 Das Problem der Allgemeingültigkeit in Kants Ästhetik』(1915)、『カントの判断力批判 Kants Kritik der Urteilkraft』(1923), 『哲学者・政治家としてのニーチェ Nietzsche, der Philosoph und Politiker』(1931), 『美学 Ästhetik』(1933) 等がある。

⁽⁷⁾ **Arp** 詳細不明

Kaufmann 詳細不明

Stellrecht 詳細不明

Wallowitz, Walther (生没年不祥)

国家社会主義教育学者。ペーターゼンの前記著書の中に若干の記述あり (S.165.)。

についての完全な分類がなされてある。その箇所にあるタイトル一覧表は、クリーク周辺の人々の学術的著作において、概念の規定、テーマの限定、そしてのちにまで影響を及ぼすイデオロギー的な策動〔Programmierung〕がある程度進展していたことを、また〔それらが〕全体主義国家において言及されていた都合から進められたに違いないことを示している。またさらに、〔この〕文献目録に同様に組み入れられている彼の講義や演習のタイトルは、これらの——ここではこれ以上詳述できないが——確証をはっきりと裏付けている。

エルンスト・クリークの〔von〕、またエルンスト・クリークについての〔über〕文献目録の序論という枠組みにおいては、彼と国家社会主義ドイツにおける教育科学に関する一連の問題は、これ以上追究されない。しかし、彼の教育科学を分析するには——ドイツの他の教育学者以上に——20世紀ドイツにおける政治の展開を計算にいれなければならない、ということは明らかになったであろう。したがって、この著作目録の補遺においてクリークの短い伝記を通して補足されることになる、ここに把握されたさまざまな確証は、彼の思想についてのあらゆる解釈の試みに対して、その歴史的・教育学的、また現代史的な理解にとって必要不可欠な助言をあたえることになるだろう。

IV

この文献目録はすべての部分に完全を追求したが、しかしながら、まったくそのようなものになったというわけではない。そのため、彼が第一次世界大戦の終わり頃に現下の政治的諸問題について述べた小さな新聞記事については、さまざまな技術的理由からつきとめることができなかった。だが、これは重大な欠落ではない。なぜならば、それらについては大体が読者からの手紙であったり、バーデン内の学校行政に発した諸問題のための覚書や論評に関するものであったり、彼はどのみちそれらの見解を自分の——この文献目録によって入手できる——数多くの雑誌の論説に繰り返しているからである。

〔クリークの著作物が〕平行して公刊されている状況を目録に載せることの特別な価値は、単に入手の可能性が広がるという理由によってのみ尊重されるわけではない。クリークは自らの論説をまさに撒き散らし、狙い違わず打ち込んだが、書物に関して言えば、このことは出版社にもあてはまる。とりわけ国家社会主義の時代に入る前や第三帝国の初期には、実にさまざまなグループの、また実にさまざまな思惑や心情の団体の新聞や雑誌があった。これらは、さしあたりは国家社会主義と折り合う傾向があったものの、のちには自らに強制を加えて〔国家社会主義に〕甘んじたのである。まだ最初のうちは、争うことなく認められている国家社会主義教育学者エルンスト・クリークに原稿を依頼するのは当然のことであった。〔だが〕その後、ナチ教員同盟広報室、教育・学問および国民形成を所管する帝国国務省、ならびに党当局の審査委員会によって統制された教育学関係のジャーナリズムは、彼の論説の更なる組織的普及に気を遣うこととなった。クリークの出版物は、いくつかの雑誌の間でも、もともとはまったく逆方向の評価形成がなされていたことが認められているのだ。これらの撒き散らされたジャーナリズムの位相をよりよく定めることができるよう、また国家社会主義が編集スタッフたちに次第次第に浸透していく過程を認識できるよう、後に添え

られた雑誌索引には補足的に、評価形成者である代表者や編集者についての理解に不可欠な情報が含まれている。

補遺：エルンスト・クリーク伝

辺境伯の土地に古くから定住するプロテスタントの職人の息子として、エルンスト・クリークは1882年7月6日、ミュールハイム〔Müllheim〕（南バーデン）のフェーギスハイム〔Vögisheim〕に生まれた。1892年にミュールハイムの実科学校に移る前、彼はまず当地の国民学校に通った。1898年からは、クリークはカールスルーエにある師範学校の受験準備生となった。この学校の専門段階を修了したのち、1900年に、クリークはバーデンで教職に就いた。たび重なる移動の背後関係についてなんらの説明もないまま、彼は助教師として、プフォルツハイム〔Pforzheim〕にあるブレートツィンゲン〔Brötzingen〕の国民学校へ（1901年10月まで）、プフォルツハイムにあるイタースバッハ〔Ittersbach〕の国民学校へ（1902年4月まで）、そしてプフォルツハイム市のとある国民学校へと（1902年10月まで）移っていった。それに引き続き、クリークはヴァインハイム〔Weinheim〕市のベルク通り〔Bergstraße〕にある実科ギムナジウムの教師となったが（1904年1月まで）、その後再びブレートツィンゲンに移った。1904年、彼はマンハイムへ移動させられた。クリークはここで1909年以後、主席教師としていくつもの学校で勤務し、1924年にバーデンでの教職から退くまでこの地位にとどまった。第一次世界大戦において、クリークは現役兵士であったが、1906年の初め頃には重い病気がもとで、教職での更なる任務に供するべく除隊させられた。

マンハイムにおける教職活動のかたわら、クリークは独学者として膨大な文献研究を進め、すでに戦争勃発前には、バーデンの学校行政に積極的に協力していた。

彼は新観念論的・文化哲学的な観点のもと、まず最初にプラトン、ヘルダー、カント、シェリング、そしてヘーゲルの思想に取り組み（『人格性と文化』⁽⁸⁾ 1910年）、継いでレッシングの思想に取り組んだ（『レッシングと人類の教育』⁽⁹⁾ 1913年）。——宗教哲学的な問題提起からは、当時すでにしばしば議論されていた近代的キリスト教解釈の問題に没頭した（『現代の正統主義とキリスト教の問題』⁽¹⁰⁾ 1910年）。

帝国の敗北と、それに続いて現れたドイツ民主化の挫折に対して——また政治的に精神性の似通ったこの時代の多くの思想家たちに対して——彼は、ドイツ国民の思想的財へと力強く立ち戻るこ

⁽⁸⁾ Persönlichkeit und Kultur, Kritische Grundlegung der Kulturphilosophie, Heidelberg; Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 1910.

⁽⁹⁾ Lessing und die Erziehung des Menschengeschlechts, Heidelberg; Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 1913.

⁽¹⁰⁾ Die neueste Orthodoxie und das Christusproblem, Eine Rückantwort an Weinell, nebst einigen Bemerkungen zu Jülicher, Bornemann, Beth und von Soden, Jena; Eugen Diederichs, 1910.

によって立ち向かっていった。国民伝統的・文化批判的観念への入り口を、彼はハーマン、ラガルデ、ラングベーン、バウアー、ニーチェ、そしてシュティルナー⁽¹¹⁾によって見出したのだ。クリークがこれらの作者たちの——体系的に完成していない——読み物から与えられた示唆は、彼の最初の政治学的・教育学的主著(『ドイツの国家理想』⁽¹²⁾ 1917年)や、『科学の革命』⁽¹³⁾ (1920年)における科学理論の方向転換の中に間接的に表れている。

「フォルクスシュールヴァルテ (Volksschulwarte)」の編集者として、またのちにはラクロアによって編集された「バーデン学校新聞 Badischen Schulzeitung」の論説委員として、クリークは「バーデン教員組合 Badische Lehrervereins」結成の重要性についての教育学的な論証に後々まで残る影響を及ぼし、また学校政策についての組合の意見形成、とりわけ統一学校を求める仲間たちの間では、相当程度に決定的な役割を果たしたのである。

⁽¹¹⁾ Hamann, Johann Georg (1730~1788)

ドイツの哲学者で「北方の賢者」と呼ばれる。カント、ヘルダー、ヤコービと親交をもち、ゲーテ、ヘーゲルにも影響を与えたが、啓蒙主義・合理主義に対する懐疑からカントとは思想的に相容れなかった。処女作『ソクラテスの追想録』(1759)はカントに対する最初の批判的著作であり、『理性の純粹主義に関するメタ批判』(1800)は『純粹理性批判』に対する対決の書である。啓蒙主義・合理主義に反対し、体験、感情、信仰の哲学を説く彼は、絶対者は悟性によってではなく、信仰する者の確固たる信念(体験)によってこそとらえることができ、真理の基準は信仰の確信であり、自然も歴史も神の啓示であるとした。また、彼は言語をもって理性とみなし、哲学は言語の解釈にほかならないとする。シェリング、キルケゴール、ベンヤミンへの影響も大きい。

Lagarde, Paul Anton de (1827~1891)

ドイツの宗教学者、言語学者、文化哲学者、教育学者、政治家。旧姓はベッティヒャー (Bötticher)。ゲッティンゲン大学の東洋語の教授。ヴィルヘルムの治世を批判し、国家主義に関心を寄せた。国家社会主義についても賛意を表わし、この実現を希求した。また強い民族意識をもち、唯物論、ユダヤ教を排撃した。

Langbehn, August Julius (1851~1907)

ドイツの言語学者、考古学者、美術史家。『教育者としてのレンブラント Rembrandt als Erzieher』(1890)を当初匿名で出版したが、異常なほどの大反響のため、1928年には84版を数えた。彼はレンブラントの中に創造的人間性と、芸術に向かう偉大な教師像を認めた。この書はドイツの教育界に波紋を投じ、芸術教育や青年運動に影響を与えた。彼は客観主義・唯物主義・合理的機械主義万能論に反対し、また専門化し、全体像を欠く学問、主知主義的・形式的な陶冶を攻撃した。真の陶冶は形成的、創造的、芸術的でなくてはならず、教育は全体としての人間そのものにはたらきかけ、これを形成しなければならないとする。芸術のみが真に全体的であり、創造的である。ドイツの芸術形式の内面化、ドイツ精神の内面化を通じたドイツ民族の革新、新しい真の陶冶、文化の向上は芸術教育に待つほかはないとした。

Stirner, Max (1806~1856)

本名 Johann Kaspar Schmidt。ドイツのヘーゲル左派の哲学者。ベルリン大学にてヘーゲルの講義を受講後、フォイエルバッハの影響を受ける。主著の『唯一者とその所有 Der Einzige und sein Eigentum』(1845)の中で極端な個人主義を展開し、自我のみが実在であり、他のものは一切が自我に仕える限りにおいて価値をもつとした。しかし彼の言う「唯一者」とは自己の固有性を全的に発展させることのできる、なにものにも服従しない自己をも所有する〈自由人〉を意味しているのであって、国家にとらわれない無政府主義の源流として理解されている。彼は、国家の中で機械の歯車のようにになっている人間のあり方に疑問を投げかけ、自己を全人的に生かすことを求めた。この考え方が、人間を政策の道具とみなす国家権力の否定へとつながったのは当然といえよう。

⁽¹²⁾ Die deutsche Staatsidee, Ihre Geburt aus dem Erziehungs- und Entwicklungsgedanken, Jena; Eugen Diederichs, 1917.

⁽¹³⁾ Die Revolution der Wissenschaft, Ein Kapitel über Volkserziehung, Jena; Eugen Diederichs, 1920.

バーデンの学校政策は、当時、カトリック主義とプロテスタント主義の間の絶え間ない宗派対立によって、しばしば起こる州議会での社会民主党の過半数獲得によって、政教分離主義者の熱心な試みや、また教育学の新しい理論（改革運動）の流行によって、激変の中へとひどく迷い込んでいたのである。とりわけ戦争と、政治生活全体が民主主義的に解剖されたあと、今や、敵対する意見は自由な議論の中に受け容れられやすいものとなった。そのさい、さまざまな教員組合の間で、さまざまな身分代表者たちの間で、そしてまたさまざまな政治集団の間で鋭い討論が、とりわけ国民学校教師の養成と地位の問題を考慮した討論が展開されていた。衝突のほかの中身といえ、たとえば宗派学校の原則や、才能別クラスにもとづく学校制度の変革に向けた新しい方向付けの最初の試みについてであった（マンハイム市私学官ジッキンガー⁽¹⁴⁾）。クリークは南バーデンカトリック司教団との、中央党との、ドイツ文献学者連盟との、そしてマンハイムの学校監督官〔Schulaufsicht〕との激しい意見衝突の中に連なっていた。彼の批判は、特に当時のバーデン州文部大臣ヘルパッハ⁽¹⁵⁾に向けられたものであったが、彼はヘルパッハに対し、社会民主党に有利にはたらくような学校政策の偏頗や、カトリック教会（宗教協約）に対する学校政策面での優遇を非難したのである。したがって、彼は教員養成問題の先送りに対しても強く異議を申し立てた。多様な教育内容をもつ学校を支持するすべての者に向けられた彼の持続的な反対行動は、のちに彼を、国民的伝統を支持するサークルへより密接に近づけることとなった。

教育理論の主著『教育の哲学』⁽¹⁶⁾（1922年）が公刊されたのち、クリークはハイデルベルク大学哲学部から「名誉博士 doctor honoris causa」の学位を授与された。その結果として1924年におこなわれたプロイセン文部大臣ベッカー⁽¹⁷⁾によるドレスデン工科大学への強力な招聘を、しかしながら彼は断ったのである。学校政策と雑誌での自由な活動に取り組めるよう、彼は1924年、バーデンでの教職から退く決意をした。クリークは1928年まで、自由な著述家としてハイデルベルクで過ごした。

⁽¹⁴⁾ Sickinger, Josef Anton (1858～1930)

本誌第38号38～39頁註（1）を参照されたい。

⁽¹⁵⁾ Hellpach, Willy (1877～1955)

ドイツの心理学者、精神医学者。哲学博士。医学博士。カールスルーエ工業ギムナジウム私講師を経て教授へ（1911）。ハイデルベルク大学正教授から名誉教授へ（1926）。この間バーデン州文部大臣（1922）、同州首相（1924）を歴任。ハイデルベルク科学学士院会員。レポルディナ自然研究者学士院会員。マインツ科学学士院名誉会員。マインツ文学学士院名誉会員。カールスルーエ医師会会員。ハイデルベルク大学にてヴントに師事。著書に『風土心理的現象 Die geopsychische Erscheinungen』（1911）、『環境の心理学 Psychologie der Umwelt』（1924）、『社会心理学 Elementares Lehrbuch der Sozialpsychologie』（1933）、『民族心理学入門 Einführung in die Völkerpsychologie』（1939）、『文化心理学 Kulturpsychologie』（1953）、『臨床心理学 Klinische Psychologie』（1952）等多数。

⁽¹⁶⁾ Philosophie der Erziehung, Jena; Eugen Diederichs, 1922.

⁽¹⁷⁾ Becker, Carl Heinrich (1876～1933)

本誌第38号39頁註（4）を参照されたい。なお、ベッカーについては、長尾十三二・W.ヴィルヘルム・A.ライヒヴァイン・F.クラット著『自己形成の教育——学校教育の再生をめざして』（長尾十三二監修・世界新教育運動選書25、1989年、明治図書）の199～204頁に詳しい。

政治的カトリック主義や民主的議会政治との学校政策をめぐる対立の激化は、クリークを国民伝統的なものの見方に加え、今やさらにイデオロギー的な接近へと駆りたてた。というよりはむしろ、この接近は、もとより過去を指向する文芸的・理論的な地平の上でなされていたため、クリークはこの接近を、この時代の保守的な著述家たちや、国家を論ずる理論家たちとの個人的な交際の中でも遂行したのであった。すでに1918年以来続いているイエナの出版業者ディーデリヒスとの交友関係は、メラー・ファン・デン・ブルック、ユンガー、シュペンゲラー、ベーム、シュターペル、フォン・グライヒェン、そしてシュタットラー⁽¹⁸⁾の周りに形成されているサークルへと彼を導いた。その後クリークは、このサークルの政治の研究会や定期刊行物——たとえば『良心 Gewissen』、『行動 Tat』あるいは『若いドイツ人 Jungdeutschen』——の中に、若々しい保守的で民族的な、そして反民主主義的な内容の政治的・煽動的な論説を絶え間なく発表したのであった。

そのような絶え間のない発表をしているにもかかわらず、クリークは就業義務によって拘束されていないこの活動期間に、彼の教育学的に重要な〔著作の〕出版を続けた。たとえば、相前後して〔出版されて〕いる三種類の相関的な著書——『人間形成論』⁽¹⁹⁾ (1925年)、『文化諸民族の陶冶体系』⁽²⁰⁾ (1927)、そして『教育科学綱要』⁽²¹⁾ (1927)——がそれである。『教育制度をめぐる闘争の中にある国家と教会』⁽²²⁾ (1927)、『ドイツ人の国家』⁽²³⁾ (1928)、『ドイツの文化政策?』⁽²⁴⁾ (1928)、ならびに『国家と文化』⁽²⁵⁾ (1929)などの諸著は、帝国学校法によって新たに活気付いた、この時代

⁽¹⁸⁾ Diederichs, Eugen (1867~1930)

本誌第37号77~78頁を参照されたい。

Jünger, Ernst (1895~1998)

ドイツの作家。保守革命論者。第一次世界大戦に、少尉として14回にわたる負傷を負いながら勇戦。これにより勲功章を受けたことにゲッベルスが目をつけ、ナチスのお抱え作家にしようとなすが、党との関わりは一生涯避けつづけた。著書には『鋼鉄の嵐 In Stahlgewittern』(1920)、『内的体験としての戦争 Der Kampf als inneres Erlebnis』(1922)等多数。前線世代の保守革命論者ではあるが、第二次世界大戦中はバリで反ヒトラー運動に参画した。

Spengler, Oswald (1880~1936)

ドイツの文化哲学者。ハレ、ミュンヘン、ベルリンの各大学で自然科学・文化科学を学び、1908年から三年間ギムナジウムの教師を勤めたのち歴史哲学の研究に入る。主著の『西洋の没落——世界史の形態学概説 Der Untergang des Abendlandes, Umriß einer Morphologie der Weltgeschichte』(1918~22)の中で彼は、すべての文化は自然の生命と同様に発生、成長、成熟、没落という長いサイクルを経ながら、独自の風土にそれぞれ相次いで、ただ一回限り成長するものであることを説いた。この文化形態学はヨーロッパのキリスト教文明が、すでに終末に近づいていることを予言したが、この予言は資本主義社会の精神的破綻、第一次世界大戦を契機とするヨーロッパ文明への絶望等から生じた宗教的懐疑主義を基調にし、絶望と不安に陥っている敗戦国ドイツの知識人の間に広まった。あらゆる文明は予定された歴史的運命にしたがって、発展と衰退の円環をなすという彼の見解はナチス政権の気に入るところとなったが、やがてヒトラーの政策に不満と幻滅をおぼえ、臆することなく政権に反対した。そのため著作は禁書・弾圧され、執筆も禁じられた。

Boehm 詳細不明

von Gleichen 詳細不明

Stadtler 詳細不明

⁽¹⁹⁾ Menschenformung, Grundzüge der vergleichenden Erziehungswissenschaft, Leipzig; Quelle und Meyer, 1925.

⁽²⁰⁾ Bildungssysteme der Kulturvölker, Leipzig; Quelle und Meyer, 1927.

⁽²¹⁾ Grundriß der Erziehungswissenschaft, Leipzig; Quelle und Meyer, 1927.

の学校政策をめぐる論争に向けられたものである。

そうこうする間に、クリークが1909年以来所属してきたバーデン教員組合の内部で、ヴァイマル共和国の民主体制との関わりをめぐり、公然たる意見の不一致が生じた。一般にみられるこの時代の心情の多元性や、急進的な政治傾向にとっては有利にはたらいた民主的中道派の萎縮は、組合をさまざまな党派的集団や、教育学上のさまざまな流派へ分解させてしまったのである。国家的な心情において結ばれていた友人であり戦友のラクロアとヘルトとともに、クリークはバーデンでの協力の解除を予告し、「バーデン学校新聞」への協力も控え、1928年には〔協力を〕完全に止めた。彼はバーデン以外の教員新聞や、もしくはたとえば「自由なドイツの学校 Freie Deutsche Schule」(ヴェルツブルク)といった、おしなべて右翼的立場の定期刊行物へ、徐々に鞍替えしていったのである。

この間の活発な著作活動によって、教育学上・教育科学上の思索が南ドイツ地域をはるかに越えて知られるようになっていたクリークは、1928年、プロイセン文部大臣によって、フランクフルト教育アカデミー正教授に、ライヒヴァイン⁽²⁶⁾の後任として招聘された。クリークはこの招聘を受け入れ、1931年までそこで教えた。

そうこうする間に、クリークはかつて国家的で保守的な心情で結ばれていたメラ・ファン・デン・ブルックを中心とする友人たちと、かなり疎遠になり始めていた。同様に、彼は政治的にロマンティックな考えをもつ人々と、たしかに精神的には引き続き連帯していたが、しかし彼らの、今やとはなはだしく分解してしまった考えは、彼には結局のところ影響力を欠いた、それどころか部分

⁽²²⁾ Staat und Kirche im Kampf um das Bildungswesen, Hamburg; herausgegeben von der Gesellschaft der Freunde des vaterländischen Schul- und Erziehungswesens in Hamburg, 1927.

⁽²³⁾ Der Staat des deutschen Menschen, Berlin; Junker und Dünhaupt, 1928.

⁽²⁴⁾ Deutsche Kulturpolitik?, Frankfurt am Main; Neuer Frankfurter Verlag, 1928.

⁽²⁵⁾ Staat und Kultur, Frankfurt am Main; Neuer Frankfurter Verlag, 1929.

⁽²⁶⁾ Reichwein, Adolf (1898~1944)

反ナチスの教育学者、教育者、民俗学者。1929年、プロイセン文部大臣ベッカーのブレインとなる。30年、ハレ教育アカデミー教授。33年、ナチス政権下で成立した「公務員制度再建法(通称、職業官吏法)」によって教授職を解かれる。同年10月(発令は8月)、ティーフェンゼー単級小学校教員となる。39年、ドイツ民族博物館「学校と博物館」部部長。44年7月、共産党員を装ったゲシュタポのスパイに密告され逮捕。10月20日死刑宣告、同夜処刑。著書には『創作する生徒たち Schaffendes Schulvolk』(1937)、『農村学校における映画 Film in der Landschule』(1939)などがある。ライヒヴァインについての研究は、近年までほとんどなされてこなかったが、U.アムルンクの大著 Adolf Reichwein 1898-1944, Ein Lebensbild des politischen Pädagogen, Volkskundlers und Widerstandskämpfers, 1991。(邦題『反ナチ・抵抗の教育者——ライヒヴァイン1898~1944』対馬達雄・佐藤史浩訳, 1996年, 昭和堂)をはじめ、多くの研究がおこなわれ始めている。またライヒヴァインの生涯と思想については、長尾前掲書『自己形成の教育』に詳しく、同書にはライヒヴァインの著書『創作する生徒たち』, 論文「C. H. ベッカー」等が邦訳されている。なお、シュタインバッハ・トゥーヒェル編 Widerstand in Deutschland 1933-1945, 1994。(邦題『ドイツにおけるナチスへの抵抗 1933-1945』田村他訳, 1998年, 現代書館)も、ライヒヴァインの思想を知る上で不可欠な文献である。

的には無秩序のように、そしてそれゆえいかなる政治的な実行可能性も持ち合わせてはいないように思えたのである。クリークの見解において教育学の改革をも常に意味していた当時の政治的諸問題に関する、単に空論をもてあそぶような処理方法を、彼は、国家的で急進的な解決のために必要な、具体的で政治的な行動性を発達させるにはまったくもって無能であると判断したのだ。だから〔クリークという〕素朴な国家的保守主義者は、殊にその純粹に数的な〔議席の〕増大が、現存する政治の権力関係の変革にとって、また広い意味においては教育学思想の新たな方向付けにとって適当な手段であるかのように思えた国家社会主義へさらに接近していったのである。その上さらに、教会に対する、政党や労働組合にある官僚主義に対する共通する攻撃姿勢、そして議会制国家に対する大方の嫌悪感は、「第三帝国 Drittes Reich」を目指す共通の希望から読み取れたのである。「ドイツのただ一種類の学校 einen deutschen Schule」というスローガンに帰着する、国民学校教師の地位と教育アカデミーの社会的上昇を求める国家社会主義者のアジテーションもまた、クリークに対しては魅力的に作用したに違いないのだが、彼はこの目標をすでに長い間主張してきていたのだった。

クリークは国家社会主義ドイツ労働者党〔NSDAP = Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei : 以下、ナチ党と略記する.〕の数多くの政治集会に、またさしあたり特定の地方——特にヴェストファーレン——でおこなわれたナチ党の教員集会に出演した。とりわけ党の新聞や雑誌によって、彼は「ドイツの新しい教育科学の告知者 K nder einer neuen deutschen Erziehungswissenschaft」として、また「まともな教育の告知者 K nder z nftiger Erziehung」として際立たされた。この地での彼の講演が折にふれて印刷禁止となったことは——内容の上ではまったく根拠のない——国家社会主義教育学者の英雄化を、すでに早くも招いてしまったのである。これらのことがもっともらしくなされればなされるほど、クリークはナチ党にとって、教育学領域でいよいよ唯一の、大学で半ば公式に認められている代弁者でありつづけたし、また「組織 Systems」の骨の折れる仕事に早くに身をおいたことに、彼自身新たな解釈をあとづけできたのだ。ただし、クリークは仕事の理由から、当初黨員になることを避けた。彼の入党は1931年から32年にかけての年の変わり目頃にやっと実現した。したがって、この時点においての入党は、クリークを少なくとも——のちに彼が称しているような、またさしあたりナチ党によって称されていたような——「古くからの闘士 Alten K mpfer」にしてはいないのである。

大学教師や集会講演者としての活動をしていたにもかかわらず、クリークは教育科学に関する一連の著作を公刊し続けた。数多くの論説とならんで、とりわけ歴史的・社会学的な教育理論としてよく知られた著作が出版された（『教育の哲学』⁽²⁷⁾ 1928年、『教育の社会的機能』⁽²⁸⁾ 1929年、『根本的な教育』⁽²⁹⁾ 1930年、『教育哲学』⁽³⁰⁾ 1930年、『陶冶の歴史』⁽³¹⁾ 1930年）。彼が『教育と陶冶に向けられる諸団体の自然権』⁽³²⁾（1930年）の中で提示した「教育学的自然権 p dagogisches Naturrecht」という着想は、彼の国家社会主義との関係から言えば〔hinsichtlich〕、さしあたりまだ相当に不確実な自己表現であることを物語っていた。というのも、のちに主張される国家（詳しく言えばナチ

党)による教育の独占については、ここではまだまったく問題になっていないからである。

しかしながら、教育学的に方向転換を果たした国家社会主義へのイデオロギッシュな接近は、1930年から32年の間に書かれた著作(『民族的全体国家と国民教育』⁽³³⁾ 1931年、『生成する民族』⁽³⁴⁾ 1932年)において、やっと認識できる形で表れ始めた。これらの著作においてすでに感じとれる国家社会主義的なメンタリティーと目標観念〔Zielvorstellungen〕の混入は、1932年に出版された『国家政策的教育』⁽³⁵⁾において、そのさしあたりのクライマックスに到達した。その観念世界と基本政策において、またその教育的な次元において、その後エルンスト・クリークの名前と同定されることとなったこの著書は、「国家に集約された教育意志 *erzieherische Wollen der nationalen Konzentration*」に——間接的にはナチ党の教育意志にも——持続的な影響を及ぼしたのである。この本が、ナチ党の完全な賛同を得ることとなった「教育学上の *pädagogische*」政権掌握を、内容的に多くの点であらかじめ先取りしていたがゆえに、また「第三帝国」の前夜に広まっていた雰囲気を経験的に明瞭に表現することを心得ていたがゆえに、この本はその後、エルンスト・クリークの著書の中で最もよく読まれる著書になっていった(1943年までに全部で25版を重ねている)。とりわけこの書の中で示された〔次の〕基本概念は、のちの国家社会主義的・教育的な宣伝用語と文化政策の中心概念となった(「国家政策的教育機関 *Nationalpolitische Erziehungsanstalten*」)。

1929年から30年頃にかけてはじめられたナチ党のための煽動活動の一環として〔in〕、クリークは1931年の夏、タウヌス〔Taunus〕のオーバーゼールバッハ〔Obersselsbach〕で開かれた夏至祭の折、第三帝国の希求へ帰着する、「国民の蜂起 *nationalen Erhebung*」を考えた尋常ならざる激烈な演説をおこなった。その疑問の余地なく極右的な内容のために、クリークはプロイセン文部大臣グリメ⁽³⁶⁾の指示によってフランクフルト教育アカデミーでの教職義務を解かれ、ドルトムント教育アカデミーへ左遷されたのであった。クリークはそこで、1932年の10月まで教えた。

⁽²⁷⁾ Philosophie der Erziehung, in: Einführung in die Philosophie, herausgegeben von Franz Schnaß, Osterwieck; Zickfeldt, 1928.

⁽²⁸⁾ Die soziale Funktion der Erziehung, Langensalza · Berlin · Leipzig; Julius Beltz, 1929.

⁽²⁹⁾ Grundlegende Erziehung, Erfurt; Kurt Stenger, 1930.

⁽³⁰⁾ Erziehungsphilosophie, München und Berlin; R.Oldenbourg, 1930.

⁽³¹⁾ Geschichte der Bildung, München und Berlin; R.Oldenbourg, 1930.

⁽³²⁾ Das Naturrecht der Körperschaften auf Erziehung und Bildung, Zur Neubegründung des Naturrecht, Berlin; Widerstandsverlag, 1930.

⁽³³⁾ Völkischer Gesamtstaat und nationale Erziehung, Heidelberg; Bündischer Verlag, 1931. ただし、クンツの『エルンスト・クリーク——生涯と著作』では、本書は1930年に初版されていることになっている。

⁽³⁴⁾ Volk im Werden, Oldenbourg; Gerhard Stalling (Stalling Bücherei „Schriften an die Nation“ Nr.38.), 1932.

⁽³⁵⁾ Nationalpolitische Erziehung, Leipzig; Armanen Verlag, 1932.

⁽³⁶⁾ Grimme 詳細不明。ただし、このあたりの事情に関しては本誌38号41頁註(10)を参照されたい。なお、この夏至祭でクリークがおこなった「疑問の余地なく右翼的な内容の」「尋常ならざる激烈な演説」は、訳者補遺として本誌に後掲した。

クリークのドルトムントへの移動は、その法的に異論のあるやり方のためだけにではなく、芽生えはじめていた教員養成大学〔pädagogischen Hochschulen〕の自立性に対する間接的な攻撃のために、相当なセンセーションを惹起した。その上さらに、彼のことを専門的にも個人的にも認めていない著名な人物たちによって連署された、クリークを支援する数多くの連帯の表明と共感の声明が出されたのである（たとえばフリットナー、ケルシェンシュタイナー、リット、ペーターゼン、そしてシュプランガー）。彼の解職を提案したフランクフルト教育アカデミーの当時の学長ヴァイマー⁽³⁷⁾ は、もう一方の側に連なっていた。

クリークは今や、国家社会主義への接近から最終的な結論を導き出し、1932年のはじめに、ナチ党に入党した。その少し前に、彼はすでにナチ教員同盟の会員になっていた。さしあたり、主としてイデオロギー的・時局政治的に決まったナチ党との関係は、彼が入党し、国家社会主義が選挙で成功をおさめたあと、ただちに新たな職務の可能性を彼に開いた。

1932年の秋にはすでに、クリークのドルトムントへの移動が——疑いもなく、この間にナチ党がプロイセンの内閣に入閣したことによって——再びとり沙汰された。クリークはフランクフルト教育アカデミーに戻ったのである。1933年春までの、彼の当地での活動に関して、述べるべきことは特になにもない。しかしながら、ナチ党による政権掌握の数週間後、彼はフランクフルト大学の、教育学の教授義務〔Lehrverpflichtung〕をあわせもつ哲学の講座〔Lehrstuhl〕に招聘された。クリークはこの招聘を受け入れ、1933年5月1日に哲学の正教授に任命され、同年の夏季学期の初めには、同大学で哲学と教育学のゼミナールの指導を引き継いだ。そればかりか、彼は夏季学期中に学長に選出されたのである。ドイツ大学初の国家社会主義者の学長は、この任務をハイデルベルク〔大学〕へ招聘される1934年の終わりまで遂行した。

クリークが左遷される一年前におこなわれたのを最初とする、大学におけるこの著しく迅速な昇進の裏事情は——かねてより判断のしにくい情報源にもとづくものではあるのだが——今日においてもなお、ほとんど再構成することができない。しかしながら、その場合には今後の研究を誤った方向へ導くことなく、それらの事情をより多くの局面に移す必要があろう。

クリークによって引き継がれた二つのゼミナールを1933年4月はじめまで指導していたティリッヒの早期退職によって、正規のポスト自体は空席であった。クリークの招聘は夏季学期が始まる前の何日かの間にやっとおこなわれている。職員リストの補充ないし変更が学期の途中におこなわれるなど、以前にはもはや考えられなかったことだが、それほど迅速に諸々の出来事が進んでいるのである。そのため、引き継がされた職員リストや研究室の配置図〔Institutsbesetzungen〕にはティリッヒ／ヴェルトハイマーもしくはティリッヒ／メンニケ⁽³⁸⁾ と明示されていたのである。社会科

⁽³⁷⁾ Weimer 詳細不明

学者ゲルロフ⁽³⁹⁾は学長として、あとから追加的におこなわれた投票による解任のポスト⁽⁴⁰⁾には、場合によっては〔新たな〕人員が配置されることはないかもしれないことを通告されていたのである。

ベルリンの党機関はクリークの任用に対して、わけでも彼の学長への選出に対して力を貸すことはまだできなかったし、少なくとも露骨に参加することはなかった。大学の自律性はあとになってから制限されたのであって、大学を国家社会主義の干渉の中に追いやった、のちの教育・学問ならびに国民形成〔Volksbildung〕にかかわる帝国文部省は、まだやっと〔それを創設するための〕法的・制度的な計画策定の段階にあったのだ。それゆえ次のように推測することができよう。大学の任用委員会はナチ党のフランクフルト支部からの激しい圧力のもとにあったのであり、それがために〔正規のポストはクリークのために〕空席になっていたのだと。だが、ベルリンからの指令にもとづくかたちでの党フランクフルト主務機関の指導が、まったくあり得なかったというわけではない。というのも当初、ナチ党の意向にもとづいて大学職員の人事やポストが交換される可能性は、党勢が拡大し、大学が無力化された後年ほど大々的なものではなかったからである。しかし、党の意向にもとづいて大学職員の人事やポストが交換されることは、宣伝活動上の理由からも、また大学教授陣を没落させる攻略的な考慮からも、ただちに、また適切に役立ったのである。

こういったことがあったにせよ、クリーク任用の裏事情についての状況分析には、なお多くの要因が考慮されなければならぬ。とりわけ、ナチ党内でのポストの分配というステップが、ナチ教員同盟の指名した帝国〔規模で〕の指導者〔Reichsführer〕は、党の意向を得ていたクリークではなくシェム⁽⁴¹⁾であった。新しく創設される文部省の、教育・学問ならびに国民形成をつかさどる

⁽³⁸⁾ **Tillich, Paul** (1886～1965)

ドイツのプロテスタント神学者、哲学者、牧師。ベルリン、マールブルク、ドレスデン、ライプツイヒの各大学講師を経て、29年よりフランクフルト大学教授。神学的には弁証法神学に接近するが、哲学的にはハイデガーの影響が強く、彼自身は自らの立場を「信仰的實在論」と呼んだ。33年、ナチス政権成立によって政治的嫌疑をかけられ、アメリカに渡る。ここにある「早期退職」とは、したがってナチス政権による教授職の罷免を意味する。

Wertheimer, Max (1880～1943)

チェコ生まれのドイツの心理学者。ゲシュタルト心理学の創始者。12年にコフカ、ケーラーとともに認知実験をおこない、ゲシュタルト心理学の礎を確立する。22年、ベルリン大学員外教授、29年フランクフルト大学教授。33年には、ナチス政権の迫害から逃れるため渡米。

Mennicke, Carl (1887～没年不祥)

オランダの教育学者。ペーターゼンの前掲書によれば、家庭、職場、職業組合、近隣などの社会生活がもつ教育力を強調した社会的教育学者 (S.162)。

⁽³⁹⁾ **Gerloff, Wilhelm** (1880～1954)

ドイツの財政学者、社会学者。11年、インスブルック大学教授、22年フランクフルト大学教授。学長着任年については不祥。

⁽⁴⁰⁾ この文脈は、ティリッヒ、ヴェルトハイマーがナチス政権の成立後に、政権の指示によって、学期の途中で追加的に解任されたことを物語っている。

⁽⁴¹⁾ **Schemm, Hans** (1891～1935)

ナチ教員同盟幹部。政治教育者。

〔für〕帝国国務大臣としては——世間にはきっとこのように広まっていたと推測される——国民学校教師にして大学教授のクリークではなく、それまで比較的無名であった高等学校正教諭〔Studienrat〕のルスト⁽⁴²⁾が予定されていたのである。クリークには大学の再建が委ねられたのだ。

しかしながら、のちに生ずる党の意見形成に対するクリークの影響力の低下の始まりをここに見るのは間違いなく誤りであろう。少なくとも1933年春という時期は、功績のある党員を褒めちぎって厄介払いするといったやり方で再び大学——すなわちこの間に異論を残しながらも生じている〔クリークの〕管轄領域——に引き離すには、まだ適当な時期ではなかったのである。

1932年から34年にかけて、クリークの著作の生産性は、特にフランクフルトにおける大学政策に関する活動（「民族、国家ならびに政治に関わる講師団の労働共同体 Arbeitsgemeinschaft der Dozentenschaft für Volk, Staat und Politik」）とナチ党への尽力のために、著しく低下した。主だったものとしては、彼の著作『教育の哲学にもとづく国家社会主義的教育』⁽⁴³⁾（1933年）を参照されたい。性質上、この書は国家社会主義的内容を保持した彼の『国家政策的教育』（1932年）の書き換えであった。機能的に見るなら、この書は彼の前著〔Vorgedachte〕を、現実の最近つくられた身分〔Verhältnissen〕をもって吹き替える〔synchronisieren〕という課題を果たしたわけである。とにもかくにも、彼の以前の著作は、たとえばこの間に国家社会主義へ転向したアルマーネン出版社を通じ、多くが増版された。それらの著作の急速な普及には、ボウラー⁽⁴⁴⁾によって管理されていた党当局の検閲委員会（PPK = Parteiamtliche Prüfungskommission）が貢献していたのだが、この委員会はクリークの著作を特権的な地位へと押し上げ、管轄する図書館へのそれらの購入を確保していた。——〔それにもかかわらず〕1933年に設立された「エルンスト・クリーク財団 Ernst Krieck Stiftung」、すなわち学生図書館〔Studentenbucherei〕であるところの国家社会主義文献参考図書館〔nationalsozialistischen Handbibliothek〕のその後の発展については、なんらの資料も存在していないのである。

⁽⁴²⁾ Rust, Bernard (1883～1945)

ナチス政権の文部大臣。高等学校教師時代の22年にナチ党員となり、25年にはナチ党南ハノーファー大管区の指導者となった。党内急進派のシュトラッサー派に属していたにもかかわらず、ヒトラーによって党内主流派への復帰・合流を好意的に許された。33年2月にはプロイセン州文部大臣に、34年4月には帝国文部大臣（上記）に任命された。45年5月、自ら命を断つ。

⁽⁴³⁾ Nationalsozialistische Erziehung begründet aus der Philosophie der Erziehung, Osterwieck・Harz・Berlin; Zickfeldt Verlag, 1933.

⁽⁴⁴⁾ Bouhler, Philip (1899～1945)

総統官房長。ナチ党草創期には「フェルキッシャー・ベオバハター」紙で働き、25年から34年までは党の収益管理人を務めた古参闘士の一人。33年、ナチ党全国指導者の地位を与えられ、翌34年、ヒムラーの後任としてミュンヘン警察長官に就任すると同時に総統官房長となる。そしてこのあと（就任年は不明）、上記で述べられているように、認可図書・禁書リストを発行する党検閲委員会の議長となる。39年9月には、ヒトラーによってブランド博士とともに「安楽死計画」の責任者に任ぜられる。45年、アメリカ軍によって逮捕される前に自殺。

1933年、クリークは自らの雑誌「生成する民族 Volk im Werden」を創刊し、その編集指導を1943年まで担当した。またそれに加え、彼はフランクフルトでの「新しいドイツの学校 Neue Deutsche Schule」の編集においては、指導的な協力者となった。

1934年の終わり頃、ハイデルベルク大学の哲学と教育学の正教授への招聘がクリークに対して出された。彼はこの招聘を受け入れ、早くも1934年の冬季学期には、当地での教授活動を始めた。彼は変動の激しい制度上・大学政策上の職務を相手に〔mit〕、1944年から45年にかけての冬季学期に講義活動が中止されるまで、職務を遂行した。

クリークは、ハイデルベルクで哲学のゼミナールとともに、それに組み込まれている教育学のゼミナールを指導した。当初はクリークのほか、ヤスパースやホフマンといった教授がより大きな影響力をもっていたのだが、クリークはのちにヤスパースおよびホフマンを、自らに対し個人的に恩義を感じている、また政治的にも信頼のおけるベーム、クラッセン（1938年1月12日任命）、クンツ（1940年2月27日任命）、そしてエックハルト（1944年2月18日任命）といった私講師に換えたのである（ersetzen）。学校政策上のかつての戦友ラクロアを「民族的世界観のための非常勤講師 Lehrbeauftragten für Völkische Weltanschauung」に任用したのも、ナチ党の地区指導者ロート⁽⁴⁵⁾を同様に任用したのも、クリークに起因するのである。教育学・教育科学分野における彼の真のドイツ的解釈者ヘルトの任用は、その早い逝去のため（1932年）、実現しなかった。しかしクリークはこの時、ヘルトの著書がさらに重版されるよう、面倒をみたのであった。

クリークは大学における「総統－従者の原則 Führer-Gefolgschaft-Prinzips」⁽⁴⁶⁾の貫徹という課題に、より一層向かっていった。この理想像の中で、彼は大学のさまざまな名誉職を大学行政の命令中枢に変えていった。1935年から36年まで、クリークは学部長の代理であった。その後、「大学という総統の杖 Führerstab der Universität」の構成員となり、1937年から39年まで、ハイデルベルク大学の学長であった。

1936年の夏季学期に、クリークは自らも創設に参加した国家社会主義ドイツ大学教員同盟の初代ハイデルベルク大管区大学教員同盟指導者に任命されたが、しかしそこでの指導は——恐らくは教授陣や若年講師たちの抗議によって——1938年以降、シュナイダーとシュミットフーバー⁽⁴⁷⁾の手にわたっていった。大管区大学教員同盟の指導者として、クリークは国家社会主義ドイツ学生同盟

⁽⁴⁵⁾ Hoffmann 詳細不明

Classen 詳細不明

Eckhard 詳細不明

Roth 詳細不明

⁽⁴⁶⁾ ただし「」は訳者による。

⁽⁴⁷⁾ Schneider 詳細不明

Schmidhuber 詳細不明

ハイデルベルクグループの役員および物理学教授レナルト⁽⁴⁸⁾との限定的な共同作業の中で、「民族・文化政策研究所 Volks-und Kulturpolitisches Institut」を設立した。彼の主要な任務は、講師陣と学生から成る、対等の関係をもった世界観の教育をおこなうことにあった。当初、クリークは指導を一人で引き受けたが、のちにはクンツと共同でおこなった。

〔しかし〕クリークが1935年以来ハイデルベルク大学でおこなってきた専門的・政治的なはたらきの多くも、彼の党に対する影響力の低下を覆い隠すことはできなかった。というのも、特に有能で党の路線に忠実なナチの大学教員〔Hochschullehrer〕が〔彼以外に〕いなかったからこそクリークがおよそ1936年まではなんとか占有していたイデオロギー上・政治上の優位は、とっくの昔に食いつくされていたからである。大学〔Hochschulen〕という台地では、わけてもボイムラー、クローそしてイェンシュに窺い知れる、絶え間なく成長しつづけている彼にとってのライバルが、今や十分に成長を遂げていたのだ。若年層の多い党組織の多くからは、常に批判的な声が聞かれた（アルプ、ヴァロヴィッツ、シュテルレヒト）。ナチ党という若者にとっての神話は、もはやクリークさえも恐れはばかることはなかった。また、今やすでにかなり古くなった「民族的・政治的人間学 Völkisch-politische Anthropologie⁽⁴⁹⁾」は、現実的な学校や教育の課題にとっては、ほとんど実用的ではなかった。——おまけに互いに激しく論駁し合っている、教育分野でのナチ党の指導的代表者たちとの結びつきも、目に見えて悪化していた。ナチ教員同盟とのつながりは、それがのちにヴェヒトラーによって指導される中で途切れていったし、またヒトラー・ユーゲントとのつながりもアクスマンによる指導のもと、同様に途切れていった。帝国文部大臣ルストとの以前からの一触即発の関係も、さらに悪化していった⁽⁵⁰⁾。たしかに、帝国学生指導者シェールとの良い関係は今もなお掌中にしていたものの、クリークは帝国宰相官房長ボルマンや大管区長ヴァーグナー⁽⁵¹⁾とは、特にひどい敵対関係を生じていた。彼らに対する党内の支援や、面目をかけた争いの対象にまで発展していた大学政策分野（大学立法）における彼らの権限は、特に大学が戦争準備に間接的に組み入れられ、大学の本当の意味が弱体化した第二次世界大戦の直前に強められていた。

⁽⁴⁸⁾ Lenard, Philipp (1862～1947)

ハンガリー生まれのドイツの物理学者。ヘルツの弟子。ブレスラウ（1894）、アーヘン（95）、ハイデルベルク（96）、キール（98）の各大学教授を務めたあと、再びハイデルベルク大学に戻る（1907）。陰極線の研究にて1905年にはノーベル物理学賞を受賞する。アインシュタインとは感情的に相容れず、ナチス政権を積極的に支持した。

⁽⁴⁹⁾ 原文では Anthrologie となっているが、これは Anthropolgie の誤りであると思われる。

⁽⁵⁰⁾ 1936年、ハイデルベルク大学では創立550周年の記念式典が開かれ、クリークは最高責任者としてこれを取り仕切るとともに、「問題としての学問の客観性 Die Objektivität der Wissenschaft als Problem」と題する講演をおこない、列席しているルストほかナチ党首脳に自らの大学改革・学問改革の理念を認めさせようと図ったが、もはや党内での影響力を失いつつあった。またルストをはじめ党首脳と対立関係にあったクリークの主張は、体良く無視されたという。なお、ルストとの現実の緊張状態とは裏腹に、この記念式典でおこなわれたクリークの講演は、ルストのそれとともに『国家社会主義ドイツと学問 Das nationalsozialistische Deutschland und die Wissenschaft』として、同年ハンプルクの出版社より公刊されている。

他方クリーク自身は、一般教育についての政策の進展に失望させられていた。国民学校教師の大学での完全な養成は認められず、ただ「教員養成大学 Hochschulen für Lehrerbildung」しか設立されなかったのだ。大学〔Universitäten〕の政策的組織改革に関して言えば、クリークの意向は中途半端なまま留め置かれていたのである。専門大学〔Hochschulen〕は全体としてみれば世間一般の軍事化と、それと結びついた——軍事力と戦時経済とに相当な意義を認めている——若者の選択基準の価値転換という趨勢の中に、意味を失ったのである。このことの意味をクリークは政治的には了解したが、しかし教育実践的には〔ausbildungspraktisch〕依然として了解しなかった。クリークの思弁的傾向によっては、新しい要求には応じられなかったのである。彼は今や、否定的な意味に解釈される「哲学者 Philosoph」にとどまっていた。

それゆえ、エルンスト・クリークの著作活動の晩年期は、国内亡命による個別的で独立した組み立てによって特徴づけられる。今やクリークは主として——実際のところ政治権力的に重要ではない——「民族的・政治的 völkisch-politische」人間学や、そこから導き出される歴史神話的・科学哲学的な問題に関わる一連のテーマに取り組んでいた。軍事的摩擦に関するクリークの理解にとって、重要なのは「世界観上の決着 weltanschauliche Entscheidungen」なのであって、武力の問題ではないのである。この理想像は、1936年から42年の間に書かれた著作——たとえば『民族的・政治的人間学』⁽⁵²⁾ (1936~38年)、『世界観上の決着』⁽⁵³⁾ (1939年)、そして『市民時代の神話学』⁽⁵⁴⁾ (1939年)——の背後に変わらずに存在している。また、この時代に世に問われた他の著作も、このような考えに

⁽⁵¹⁾ Wächtler 詳細不明

Axmann 詳細不明

Scheel 詳細不明

Bormann, Martin (1900~1945?)

ハルバーシュタット生まれの上級ナチ党員で、ヒトラーの秘書長。ナチスの最高幹部の一人で、ヘスに次ぐナチ党ナンバー・ツー。ルール占領と極度なインフレで動揺するヴァイマル政府の打倒と政権奪取を狙い、23年のミュンヘン一揆に参加。ヒトラーなどとともに投獄される。釈放後、25年にテューリンゲンのナチ党に入党、同地方の党出版局秘書となる。28年、テューリンゲン大管区指導者に就任するとともに、資金調達のをを買われ、党会計係に就任。41年、ヘスがナチ党を追われイギリスに逃れると、ナチ党（帝国宰相）官房長に昇進。44年、「国民突撃隊 Volkssturm」隊長就任。ヒトラーが戦争の指揮に追われるかたわら、ボルマンは党組織の強化に努める。官房長権限によりヒトラーとの面会に制限を加え、時にはゲーリング、ゲッベルス、ヒムラー、シュペーアでさえも、ヒトラーに会うことを制限された。大戦末期にヒトラーがエファ・ブラウンと地下壕に退避したあとは二人の結婚を見届け、ゲッベルスの死を確認し、総統の承継をデーニッツに伝達した。ヒトラーの自殺後はソ連軍との交渉を試みるが、それが不可能であることをさとると地下壕からの脱出突破を命じた。最後は不明な点が多いが、ナチス政権の残党が首相官邸から集団蜂起したさいにソ連兵によって殺害されたとみられる。45年11月から46年10月までおこなわれたニュルンベルク国際軍事裁判では本人欠席のまま、他の21人の被告とともに裁かれ、死刑を宣告された。戦後しばらくの間、南米を中心にボルマン生存の噂がたびたび流れたが、72年には、ベルリンで偶然掘り出された遺骸が、法医学者の鑑定によって正式にボルマンのものであると認定された。

Wagner 詳細不明

⁽⁵²⁾ Völkisch-politische Anthropologie

1. Teil: Die Wirklichkeit, Leipzig; Armanen Verlag, 1936. (Weltanschauung und Wissenschaft : Band 1)
2. Teil: Das Handeln und die Ordnungen, 1937. (Band 2)

もとづいて著されている（『世界観の原理としての生と学問の問題』⁽⁵⁵⁾ 1938年、『民族性と使命感』⁽⁵⁶⁾ 1940年、『歴史の中の人間』⁽⁵⁷⁾ 1940年）。『自然と自然科学』⁽⁵⁸⁾（1942年）ならびに『幸福と力』⁽⁵⁹⁾（1943年）で、クリークはついに、以前ならば彼の身近な人々がきっと同意すらできなかった〔であろう〕着想を述べている。——彼の当時の自己理解と、個人的・学問的な発展経緯に対する自己評価の点で重要なのは、小著『身をもって知った新しき理想主義』⁽⁶⁰⁾（1942年）であるが、この著作は題材を限定した抵抗の試みによって〔von situationsbedingten Abwehrversuchen〕強く特徴付けられている。明らかに認め得る自己批判にもかかわらず、もはや何も彼の影響力の低下を阻止する〔ändern〕ことはできなかった。

しかもその上、クリークは1942年以降、紙を配給されていた。なおそのためさらに、彼は長年にわたっておこなってきた自らの雑誌『生成する民族』の編集指導をやめなければならなかった。その後間もなく、『生成する民族』は発行を完全に停止した。

1945年の春にドイツ帝国が崩壊したのち、クリークはハイデルベルク大学の哲学ゼミナールや大学評議会のあらゆる職務を免職され⁽⁶¹⁾、連合国軍の収容所に入れられた。エルンスト・クリークはプファルツに〔Pfalz〕あるモースブルク〔Moorsburg〕連合国軍収容所にて、1946年⁽⁶²⁾、64歳にて逝去した。

訳者補遺

訳者は脚注（36）および（37）の解説として、クリークが1931年にタウヌスで開かれた夏至祭でおこなった「尋常ならざる激烈な演説」を示しておきたい。トマーレだけではなく、プロイエルやミュラーもその書に記している一連の左遷劇は⁽⁶³⁾、長尾十三二も指摘するように「クリークをナチへ追いやる決定的な契機となった。」⁽⁶⁴⁾では、シュプランガーやリットなど、それまでクリークと

⁽⁵³⁾ Weltanschauliche Entscheidung, Wien・Leipzig; Österreichischer Landesverlag, 1939.

⁽⁵⁴⁾ Mythologie des bürgerlichen Zeitalters, Leipzig; Armanen Verlag, 1939.

⁽⁵⁵⁾ Leben als Prinzip der Weltanschauung und Problem der Wissenschaft (Weltanschauung und Wissenschaft: Band 7), Leipzig; Armanen Verlag, 1938.

⁽⁵⁶⁾ Volkscharakter und Sendungsbewußtsein, Leipzig; Armanen Verlag, 1940.

⁽⁵⁷⁾ Der Mensch in der Geschichte, Geschichtsdeutung aus Zeit und Schicksal (Weltanschauung und Wissenschaft : Band 9), Leipzig; Armanen Verlag, 1940.

⁽⁵⁸⁾ Natur und Naturwissenschaft, Leipzig; Quelle und Meyer, 1942.

⁽⁵⁹⁾ Heil und Kraft, Ein Buch germanischer Weltweisheit, Leipzig; Armanen Verlag, 1943.

⁽⁶⁰⁾ Erlebter Neuidealismus, Heidelberg; Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 1942.

⁽⁶¹⁾ ミュラーの『エルンスト・クリークと国家社会主義的な学問の改革』によれば、クリークが職を解かれたのは1945年11月19日となっている（S.159）。

⁽⁶²⁾ この記述は誤りであると思われる。管見の限り、クリークの死亡年は、それが記されている諸資料すべてで1947年となっており、ミュラーのものでも死亡年月日は1947年3月19日となっている（ebd.）。

は思想的に相容れなかった教育学者までをもクリークの側に立たせた左遷劇のそもそもの原因は、クリークのどのような言動に起因するのであろうか。なお、記者はこの「尋常ならざる激烈な演説」が補遺として掲載されている『民族的全体国家と国民教育』（1932年）の「第2版への序言」を本誌38号に訳出した（41～43頁）ので、これも「演説」の補遺として参照されたい。

原稿など用意されていなかったであろう「演説」には、前後のつながりがよく分からない部分も少なくないため、箇所によっては意味が変わらない範囲で意識した部分もあることを付記しておく。翻訳上の留意点は上に訳出したものに同じである。

エルンスト・クリーク著『民族的全体国家と国民教育』（1932年）より

「補遺：火のそばでの演説／タウヌスでの夏至祭にて」

Krieck, E., Anhang: Rede am Feuer. Johannisnacht im Taunus.

in: Völkischer Gesamtstaat und nationale Erziehung,

Heidelberg; Bündischer Verlag, S.42f., 1932.

真夏の夜に灯された夏至祭の火よ。太古からのシンボルは移りゆく生から常に新たな内容を創りだし、しかしまた人類の連鎖を通して自らの意味を保持する。世界の暗闇からの光の誕生よ、母なる大地からの生の誕生よ、人間の心の中に輝く神の誕生よ。クリスマスに蠟燭が燃えるときも、春や真夏の夜に薪の山が炎を上げて燃え立つときも、火は新たな生を、新たな時代を、新たな光を告げ知らせる。われわれもまた、辛苦に充ちた暗闇から生まれ出ようとしているのだ。そして、われわれにとって夏至祭の火は、訪れつつある世界的記念日の喜ばしい知らせなのである。

いつの時代にも、若者は慣わしと、飛翔しつつある生のシンボルのまわりに集う。新しい生に生き、新しい生を形作ることが、若者の意味なのである。そしてそのさい、若者は自らの生の形式を結束すること〔Bünden〕の中にもつ。つまり、友情や同胞愛における結びつきに。農村の若者やツンフトに所属している職人の若者も、あるいは上級学校の若者も。未開民族の若者も、高度な文化をもつ民族の若者も。彼らはことごとく、自分の教育を結びつきの中に完成してきたのだ。結びつきと慣わしは、互いに密接に補完し合って一つの全体を形作っているのだ。

しかしながら、われわれのもとには、莫大な経済的利潤を基準とした単純理解の〔des reinen Verstandestums〕、プラグマティズムの、そして疾走の時代が来てしまった。そのため若者の結びつきは破碎され、慣わしは忘却され、若者の生き生きとした感覚のシンボルは奪われてしまったのだ。

⁽⁶³⁾ Bleuel, H.P., Deutschlands Bekenner, Professoren zwischen Kaiserreich und Diktatur, Bern · München · Wien; Scherz Verlag, 1968, S.201.

Müller, G., Ernst Krieck und die nationalsozialistische Wissenschaftsreform, Weinheim · Basel; Beltz Verlag, 1978, S.84ff.

⁽⁶⁴⁾ 長尾十三二前掲書24頁。

しかし干からびさせぬ限り、われわれの生が根と肥沃な土地から切り離されることはない。若者が学校を見捨て、故郷の大地を探し求め始めて以来、今まさに一つの時代が到来したのだ。若者は歌、ダンス、シンボル、そして慣わしをもった結びつきのある世界を市民的な生の形式に対置させているのだ。ドイツのきたるべき時代を先に立って照らす薪の山を若者が暗闇の中に燃え立たせるとき、時代が変わる兆しが見えてくる。

若者が、活動を停止した過去へと目を向けたとき、彼らはそれがために非難された。だが、シンボルとは永遠なるものと不滅なるものの徴表であり、シンボルはあらゆる生の、あらゆる誕生の源泉を指し示している。慣わしがきたるべき時代の灯火信号になるべきなのだ。春の訪れによって植物が繰り返し成長するように、民族は、新しい世代があらわれることによって、その歴史の中に繰り返し生まれるのである。

見せかけだけのロマンティシズムは、若者の結びつきが公の生から離れたところで、自分たちだけの人知れぬ祭りを祝い、そのうえ状況をなりゆきに任せている限りにおいては光り輝くことができた。〔だが〕そのとき、偉大なる運命の時は、若者の結びつきを事件という流れの真っ只中に巻き込んだのである。彼らの歩みは歴史に対する犠牲となったのだ。それゆえ、次のことは至るところで認識できよう。民族の貧困とは、まったくもって若者の貧困なのである。大学生の若者がイペリットガスを用い、ドイツの歌を歌いながら無感覚に飛び降り自殺するなどは、最初の徴候である。忍耐に欠ける者に向けては、30年もしくはそれ以上の年月にわたる青年運動が成果をあげてきていることを思うべきだし、またかの若者の最初の一団が天候荒れ狂う中、フランドルからアラビアまで、バルト諸国からサロニキまで、さらには奥深くアフリカや中央アジアまで行ったことを思い起こすべきである。

〔若者の貧困を表す〕二つ目の層〔の若者〕もまた、ドイツの将来への犠牲として、さしあたり外見上は無駄な犠牲として身罷っている。誰からも呼び寄せられていないのに瞬時に現われたと思いきや、この若者たちは防衛戦でオーバーシュレジエンに駐留し、杖をつきながら大砲に向かって姿を消していった。ドイツの国土とドイツの自由のために戦われたところでは、彼ら〔のような若者〕はいつも最前線にいた。〔だが〕今度は結びつきのあるやりかたで〔in der bündischen Form〕なされている。バルト海沿岸地方で三角旗のもと海賊の歌を歌いながら戦った、〔また〕ヴァンダーフォーゲルの一団のようにいろいろな村や町を通って行進したハンプルクのかの義勇軍は、若者の結びつきが歴史を創っていることを、ヴァンダーフォーゲルのロマンティシズムが世界的現実となったことを示している。大隊の若い指揮官が戦闘帽をヴァンダーフォーゲルのふちなし帽に替えた時も、彼の戦友たちは今が戦闘の最中であることを自覚していた。バルト海沿岸地方では600人が軍務についていたが、そのうち帰国できたのは24人〔zwei Dutzend〕にも満たなかった。

二つ目の層〔の若者〕はこのようにして身罷っていった。生き残った者は、たいてい無口になっ

た。だが、多くのものは故郷で人とのつながりを得ることはなかった。彼らは獄中で、外国や異郷で身を持ち崩したのだった。〔けれども〕これらのうちの2・3人は、その感動的な書物によって、三つ目の層〔の若者〕のための報告者となった。君たちのために、私の若い親友は……という感じで、ルールとの戦いで犠牲となったアレマン人の乱暴者アルベルト・レオの記念碑のところでは、つい最近もいくつかの若い団体〔Bünde〕が遺産を護り、神聖な火を護ったことを称えていた。われわれは新しいドイツの先触れの使者として、彼らのようなすべての人々をこの火の輝きの中に、畏敬の念をもって思い出している。

この真夏の夜に、われわれは過去に目を向け、このラインの大地の偉大なる息子、ドイツ帝国男爵フォン・シュタインを偲んでいる。プロイセン国家の棟梁である彼は、この国に礎石としての教育理念と国民理念を据え付け、そうすることによって新しい帝国に基盤をもたらしたのである。〔だが〕彼の仕事は未だに未完の文書―すなわち遠い将来のための説明書でありつづけている、われわれへの遺贈物なのである。彼の功績は、ドイツ人の力強い過去の歴史が再び彼らに披瀝されたことによってまた、感謝されなければならない。〔だが〕この記憶には苦い思いが混じっている。シュタインがドイツ人の父祖となってからの100年間、彼の功績の中核にある共同体の〔der Gemeinden〕自治は停滞し、根底から踏み潰されてしまったのである。

われわれは次に (zum andern)、この火のそばで、われわれのためにドイツの運命を、ドイツの窮乏を、ドイツの止み難い心の動きを遠い将来へ向けて起こし上げてくれた、現存する作家が成した転換について述べてみたい。われわれの敬意は、その濃厚なニーダーザクセンの血によってよみがえったヴェザー川のほとりで、神を相手に〔mit〕ドイツ人の心、ドイツ人の生のひろがり〔Lebensraum〕を手に入れようと努力している世界の遍歴者ハンス・グリム⁽⁶⁵⁾に向けられる。ヴィースバーデンの彼方で彼は生まれた。

われわれは次に (zum dritten)、われわれを照らす永遠なる星の光の中で、歴史となった〔in der Geschichte〕ドイツの時代を求めるあらゆる希望と憧れについて述べてみたい。のろしは今夜燃え上がる。第三帝国よ。

700年前、西洋と東洋を照らす最後の偉大なるシュタウフェン朝の彗星が、地中海の上で光を放った。シュタウフェン朝には、零落してしまった帝国の栄華の再来についての神話がつきまとって離

⁽⁶⁵⁾ Grimm, Hans (1875~1959)

国家主義作家。大学教授の家庭に生まれる。商人としての十数年に及ぶ南アフリカ滞在の体験と印象をもとに、26年、南アフリカに生活する主人公の挫折を描いた『土地なき民 Volk ohne Raum』(全2巻)を著す。本書は、ドイツ民族がより大きな生活空間を要求することを正当化する文脈により、政権に利用される代表的ナチス文学となった。本書のタイトルはナチ時代にスローガンとして使われたが、しかし、彼自身はナチス政権に必ずしも協力的ではなく、英独和解のために努力している。戦後は『ドイツ人の答え』(49)を著し、ナチスが共産主義のドイツへの浸透を防いだことを軸に弁明をおこなっている。著書には上記のほか『南アフリカ短編集』(13)、『砂漠行』(16)などがある。

れなかった。憧れと福音であるかの〔第三帝国〕という言葉は、この時代にカラブリアの修道士によって初めて告げられ、次いで初期フランシスコ修道会の運動によって、信仰的覚醒として諸民族の心の中に植え付けられた。つまり、より崇高な共同体的存在を求める宗教的・政治的憧れである第三帝国という言葉は、時代の転換期に現われているのである。

第三帝国という言葉は、帝国が最期を迎える直前、再び明言されている。それはドイツ人の精神を暗闇と低い地位から崇高なところへ導いたゴットホルト・エフライム・レッシングの若い世代への遺贈物であったが、それは若い歴史しかもっていない他のいかなる民族も体験したこともないような贈り物であった。しかしながら〔レッシングの〕標語はまだ民族〔Volk〕ではなく、人類〔Menschheit〕となっていた。民族性や国家についての基礎固めもないまま、ドイツ人は三世代を通じて、人類の教育を精神的な広がりにもとづいて説いてきた。だからこの時もまた、第三帝国は到達し難いほど遠くにある、やみがたい心の動きのシンボルに過ぎなかったのである。

はたしてすでに8年前、第三帝国から三度目のメッセージが告げられた。今回のメッセージは、ドイツの運命としてのメッセージである。若くして亡くなったメラー・ファン・デン・ブルックにとっても、この告知は〔彼の〕最後の遺贈物であった。そして彼にとっても、第三帝国とは実に、現実と歴史へ向けられた、民族と国家へ向けられた、力強い転換を伴った宗教的な希望だったのである。民族の貧困と若者の貧困からの救済を求める、われわれの民族の力という源泉から湧き出た憧れだったのである。

この真夏の夜に、この火の輝きの中に、われわれを照らす永遠なる星の光の中に、われわれは固く誓う。

ドイツ民族への忠誠を、
若い世代に対する同胞愛を、
ドイツの時代に身を捧げることを、
それでは、この真夜中の祝典におけるわれわれの挨拶を、
ドイツの若者万歳
ドイツ民族万歳
第三帝国万歳！

（2004年12月2日 受理）